創刊号
2022/5/12

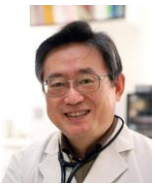
News Hypno

一般社団法人　日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）創設から 9 年を迎える 2022 年 5 月、
JBCH 会報誌『News Hypno』が創刊となりました。
本誌を通して、会員の皆さまにとってより良い環境と役立つ情報を提供していけるよう努めてまいりますので、
今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

contents

【創刊号特集】JBCH 代表理事　村井啓一インタビュー　2

ご家族の病気を機に、バリバリのビジネスマンからヒプノセラピーの道へ。ヒプノセラピーの最先端アメリカで学び、日本市場にあわせて「人格移動」など数多くの技法を独自に開発。日本におけるヒプノセラピーの第一人者として名高い、村井啓一先生が JBCH に託した思いとは。



【スペシャル対談】JBCH 理事兼医師　石原均　×　村井啓一　11

ヒプノセラピーの技法を活用した【傾聴・理解・寄り添い】の診療を実践。かつての左脳派から『イマジン』の世界を生きる臨床医・石原先生と、堅い絆で結ばれた村井先生の対話とは。

連載 【JBCH インストラクターインタビュー】 第1回　山田美妙氏　20

「自分とのコミュニケーションを整える」銀行員・看護学校の講師など豊富なキャリアを経て、ヒプノセラピストへ。広島・尾道で 36 年間、主婦から議員まで幅広い層に愛される、美妙先生が変わらずに大切にしていることとは。

連載 【ヒプノセラピー困ったときの相談室】　28

その1：サロンの近くで工事が始まった！騒音でクライアントさんが催眠に入れなかったら・・
その2：前世療法で誘導して前世に降り立ったら・・・全然見えません！の繰り返し。どうしよう！

連載 【オススメ書籍・メディア】　30

『笑いと治癒力』（ノーマン・カズンズ著／松田銑訳）
『アウト・オン・ア・リム―　愛さえも越えて』（シャーリー・マクレーン著／山川紘矢・山川亜紀子訳）

○JBCH 会員限定 Facebook グループについて　10
○アンケート結果発表　32
○JBCH 会員特典＆サポート　36
○入会＆会員資格について　37

一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

【創刊号特集】JBCH 代表理事 村井啓一インタビュー

ご家族の病気を機に、バリバリのビジネスマンからヒプノセラピーの道へ。ヒプノセラピーの最先端アメリカで学び、日本市場にあわせて「人格移動」など数多くの技法を独自に開発。日本におけるヒプノセラピーの第一人者として名高い、村井啓一先生が JBCH に託した思いとは。

JBCH 会報誌『News Hypno』創刊にあたり、JBCH の創設者であり、JBCH の創設者である村井啓一代表理事へのインタビューをおこないました。村井先生をすでによくご存知の方にも、これまで直接お話しする機会のなかった方にも、村井先生の人柄や考えに改めて触れていただき、村井先生がヒプノセラピーを志したきっかけや JBCH 創設にかけた思いを、会員の皆さまに感じていただければと思います。

（インタビュアー： 綿引千恵）

― まず、村井先生の略歴を教えてください。

私は、大学卒業後に渡米し、アラスカ大学の大学院で英詩の創作を学びました。帰国後、広告代理店、外資系企業、IT 企業等で広報宣伝の業務などにたずさわってきました。そのあと、40 代後半でヒプノセラピーを学び、この道を 20 年以上歩んできました。

アラスカ時代小屋の前で星野道夫君と

― もともとはバリバリのビジネスマンだったとうかがっていますが、ヒプノセラピーとの出会いは何がきっかけだったのでしょうか？

幼い頃、私は愛媛県で祖父母に育てられていました。小学校 3 年が終わった春休みに母が私を引き取りに現れ、私は事前の打診も了解もない状態で母に連れられて愛媛を離れ兵庫県の尼崎市に移り住みました。祖父母も友人もいない、言葉（方言）も異なる土地で、会ったばかりの母との母子家庭の暮らしが始まったのです。

それでストレスを感じたからか、吃るようになりました。悩んでいたある日、通学路にあった民家の壁に掛かっていたブリキの看板に、「催眠術で吃りを治そう」というようなことが書かれていたのです。「催眠術か・・・。スパーンと簡単に治ったらいいな。でも母ちゃんにはこんなこと言えないな」と、考えたことがありました。「催眠」というものを初めて意識したのは、このときでした。

高校や大学時代にも、催眠の本を読んでいました。日本では明治時代に催眠が流行りましたが、おそらくその当時に教えていた人たちから学んだ人が書いたのでしょう。「ヒプノセラピー」というよりも「催眠術」の本でしたが、エンターテインメントと癒しの区別がなく、「催眠の可能性」について書いてあったので、面白そうだ、不思議だ、なんで治っちゃうんだろう、などと考えていました。これは私の中で植え込みになったと思います。

今の道へとつながるヒプノセラピーと出会ったの

＜村井 啓一先生 プロフィール＞
一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（Japan Board of Clinical Hypnotherapists）代表理事/認定マスター・インストラクター
米国催眠士協会（National Guild of Hypnotists）認定マスター・インストラクター兼日本代表
日本催眠学会（Japan Institute of Hypnosis）理事

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

は、かなり後になってからです。きっかけは、家族の病気でした。当時アスクルという会社で、人事・総務・広報を管轄して東証上場前から上場直後の社内体制の構築を担当していた私は目が回るほど忙しく、睡眠時間が毎晩２・３時間ほどの生活が続きました。お正月に体が動かなくなったことがあり、脳がおかしくなったのかと思い医者にかかりましたが、過労だと言われました。「あなた、このままだと死ぬよ」と医者に言われて、そのときは休みましたが、お正月が終わったらまた忙しいペースに舞い戻るという状態でした。

そのうちに、家族全員に異変が起きていました。よくよく考えると、満足に家族との時間を取ったことがなかったと気づきました。私は、夜遅く、というよりも明け方に帰ってきて、朝早く出ていくという生活だったので、ずっと家族と会っていなかったのです。

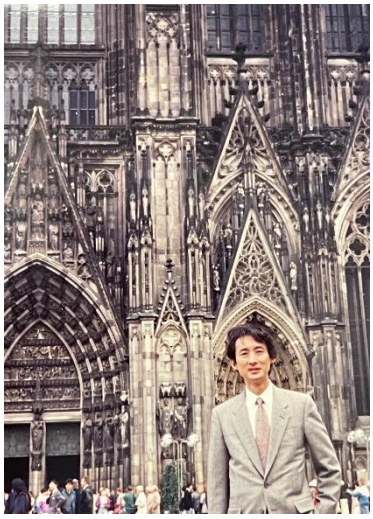
人とのコミュニケーションを円滑に行う仕事をしている自分が、家族とのコミュニケーションができていないということを思い知らされました。母親がアルツハイマーで、妻も精神的にダウン、娘も原因不明の病気、という状態でした。

当時の私は、ヒプノも何も知らず、寄り添いというのもよくわかっていませんでした。先ほどもお話ししたように、私は小さいときに、母親とも父親とも暮らしたことがありませんでした。母親とは、小学校４年から一緒に暮らし始めましたけれど、小さいときに親子一緒に暮らしていなかったので、「家庭」というものを知りませんでした。だから、「家族」という概念、「家族を守っていく」、「家族を育てる」という意識がなかったのです。それがこの状況を作ってしまったのだと思いました。

今思えば、家庭内コミュニケーションも、自分の中のコミュニケーションもできていませんでした。

当時の自分は、どうしていいかわからない、どうしようもないから、自分で学びながら埋めていくしかないと思ったのです。具合が悪くなった家族を見て、「どうするか？」と考えたときに、私が家族のために唯一できることは、そばにいることだと思いました。そばにいる、暮らしを共にする。そのために、仕事を辞めて１年間、家族のそばにいようと決意しました。そうして、仕事を辞めて家族と時間を過ごし始めたら、一緒にいるだけで、みんな改善していったのです。それは不思議なことのように思えました。

でも、やっぱりそばにいるだけでは物足りず、何か自分の力でできることを求めて、いわゆる「癒しの技法」として、何らかのセラピーを学びたくなったのです。何を学べばいいのだろうかと考え、インターネットで調べると、「ヒプノセラピー」が出てきました。「そうか、催眠には昔興味があったなぁ。ちょっと勉強してみよう」と思いました。



コダック時代　ケルン大聖堂の前

― ご家族を思うお気持ちでヒプノセラピーの学びを始められたのですね。どのように勉強されたのでしょうか？

当時日本で催眠療法を教えていた民間団体の講習を受けに行きました。今考えたら、かなり単純な内容だったと思いますけれども、顕在意識と潜在意識についていろいろ教えてくれました。それが面白くて、もっと深く学びたいと思ったのです。

催眠の研究はアメリカが一番進んでいるということだったので、アメリカへ勉強しに行こうと思い、調べていくつかの催眠団体で学びその団体のメンバーになりました。アメリカだと、NGH（National Guild of Hypnotists）、ABH（The American Board of Hypnotherapy）、IARRT（International Association for Regression and Therapies）やAAPH（American Association of Professional Hypnotherapists）、IHF（International Hypnosis Federation）ですね。NGH の年次総会で出会ったアメリカのセラピスト達からも多くのことを学びました。それから、イギリスの団体HCB（Hypnotherapy Control Board）にも昔入っていました。今はなくなった団体（AAPH、IARRT、HCB）や退会した団体（ABH、IHF）が多いのですが、一

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

番歴史が古く極めて良心的な NGH には今でも所属しており、その日本代表を務めています。

私はアメリカからたくさん学んだのですが、ヒプノを学んで 2 年目位から “Many Lives, Many Masters” (邦題『前世療法』)を書かれた、前世療法の世界的権威である精神科医ブライアン・ワイス先生の講習を受けに行きました。ワイス先生の人間性に惹かれ、それ以来、毎年ずっとワイス先生の講習を受けに訪米するか、ワイス先生を日本にお呼びするという関係を続けてきました。残念ながらこの 2 年はコロナの影響でできていませんが、それまでは毎年、時には年に 2 回、講習を受けに行ったりしてワイス先生とのつながりを持ってきました。

日本からの参加者と OMEGA でも夜に勉強会

私は、色々な勉強をしながら、アメリカにはアメ

OMEGA でワイス博士と日本からの参加者で記念写真

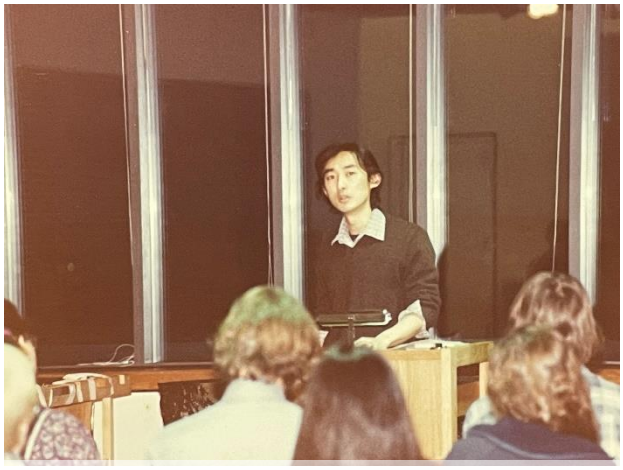
リカの事情が、イギリスにはイギリスの事情があるというように、各国の事情や法律があり、ヒプノセラピストができることが各国で違うということがわかりました。勉強を進めるうちに、日本の事情もアメリカの事情もわかってきました。

― そのようにヒプノセラピーの学びを深めていかれたということですが、ご家族には実際にセッションをされたのでしょうか？

ヒプノセラピーを家族に使いたいと思って学びを深めていったのですが、家族にも使える方法と使えない方法があるということが後からわかりました。単純にリラックスさせたり、求める暗示を植え込んでいったりというような暗示療法であれば問題なくできるでしょうが、過去の記憶を探っていく年齢退行療法などでは、セラピーを行うセラピスト自身が、セラピーを受けるクライアント（家族）が抱える問題を与えた張本人なのかもしれませんし、あまりプライベートなことを知ってしまうと以降の家族関係に支障をきたす恐れがあるのです。家族に使うのは難しいとわかったのです。

それでも、自分がヒプノセラピーをやっていくうちに、ますます興味を持ったのです。ヒプノセラピーとは、結局のところコミュニケーションだと思います。そして、学んでいるうちに、私は小さいときからずっとコミュニケーションで苦労してきたということがよくわかりました。

小学校の頃から吃りだったので、吃らない言葉で言い換えるために辞書を読んでたくさんの言葉を学びました。そして、先生から、宮沢賢治の詩を教えてもらい、文学を知り、アルチュール・ランボーなどフランス語の詩や、T・S・エリオットなど英語の詩に興味を持ち、それで自分も詩を書きたいと思うようになったのです。ずっと言葉によるコミュニケーションを模索していたのです。



アラスカ大学での詩の朗読会 1982 年

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

【創刊号特集】

― せっかくなので、ヒプノセラピーの道に進まれる前の村井先生の人生についてもお聞かせください。

同志社大学の英文科で英文学を専攻しましたが、大学の美術部に入って、絵を描きながら、同人誌を作って詩を書いていました。かつて、京都の今出川通りにあった『ほんやら洞』という喫茶店の２階のホールで開催されていた詩の朗読会によく参加していました。あるとき、そこでアメリカの詩人ケネス・レクスロス氏と出会いました。

そして私の英語で書いた詩を読んでくれて、「君、アメリカで真剣に勉強したらどうだ。サンタバーバラに住んでいるから、アメリカに来たら訪ねてきなさい」と言ってくれました。それを真に受けて行ったのです。大学を卒業して、2 年半くらい仕事をしてから行ったので時間はかかりましたが。会いに行くと、もう晩年近くのケネスは「時間がない、もう時間が残されていないのだよ」と口癖のように呟いていました。申し訳なくなって２泊させてもらってからお暇しました。

その後デンバーに行って、英語の勉強をし、大学院の試験を受けて、最終的にアラスカの大学院を選びました。なぜアラスカ大学を選んだかと言うと、そこの学部長から「詩人にとってアラスカは理想の地です。アラスカの自然があなたを詩人にしてくれるでしょう」という手紙をもらったからです。学費も安かったですしね。そうして、アラスカで 20 代後半の約 5 年間を過ごしました。そこで、写真家の星野道夫君とも出会いました。

デナリ自然公園でムースのツノ発見（撮影：星野道夫）

現地ではアラスカ先住民(エスキモーやインディアンたち)と交流するのも英語でしたが、彼(女)らにとっても英語は第二外国語なので、お互いに身振り手振りで顔を見ながらコミュニケーションをしました。そうしたことも大切な経験でした。大学でアサバスカン・インディアンの言語を学んだり、エスキモーの家族を訪問して一緒に過ごしたり、アザラシ猟に連れていってもらったり、夏の間サーモン漁をして過ごしたりと、得難い経験ができたアラスカ時代でした。

アラスカ時代　サーモン漁のテントの中

アラスカ時代　現地の小学生に兜の作り方を指導中

約５年間の滞在で創作科の修士号(Master of Fine Arts) を取得して帰国しましたが、詩では「メシが食えない」ので英文のコピーライターとして大阪の広告代理店で働き始めました。そこで広報宣伝の仕事を覚えました。そのあと、東京に移り、外資系企業(スクイブ、コダック、デル)で広報宣伝関連の業務にたずさわってきました。最後に務めたアスクルは、岩田彰一郎社長(当時)の理念に惹かれて入社を決め、管理部門（人事・総務・広報）担当の取締役として働きました。本当に人のことを親身に考える、人間性を考える会社で、理念と実体が合致していたのです。身体にとってはハードでしたが、心が喜ぶ会社でした。岩田さんには今でも感謝しています。

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

― その後退職されて、ヒプノセラピーの道を極めていかれたのですね。

そうです。ヒプノセラピーを本格的に極めていこうと思ったのは、効果を自分で確認できたからでした。すごい癒しの効果があるとわかりました。それに、まだ日本でこの分野をやっている人が少ないということも極めたいと思った要因のひとつです。そもそも、誤解のある分野でしたし、だからこそ、参入する人が少なかったのでしょうね。

私自身については、インドに行った経験がありますが、そこで科学で割り切れないことがこの世にたくさんあるという現実を思い知らされました。そうしたことも、いろいろなことを理解する助けになっているでしょうね。

もともと私は、自分の中で科学を追求する意識が強かったのですが、現代科学では解明できないことがあるということがわかりました。スピリチュアル的なものを否定してはいけないと思ったのです。自分の役割はなんだろうと、人間存在について考えたとき、理性を考えたとき、理解できる分野と理解できない未知の分野があります。昔の人は、死とか未知のことを怖がりましたね。

私は、ヒプノセラピーを学んで、死が怖くなくなりました。前世療法を通して、また生まれ変わるという体験をした結果、本当に生まれ変わりがあるかないかの科学的な検証など、現代科学ではできないということもわかりました。しかし、生まれ変わりがあろうがなかろうが、死の不安は消えたのです。ヒプノセラピーは、そういった不安を消してくれる効果があると実感できました。また 2000 年あたりから脳科学が発達して、長期記憶のメカニズムが解明されてきました。年齢退行療法として 19 世紀後半にピエール・ジャネが使った長期記憶の書き換えによって、なぜ人が癒やされるのかがわかってきたのです。この科学の発達もヒプノセラピーの効果に対する確信を私に与えてくれました。

サイババのアシュラム(インド)にて

― ヒプノセラピーの道に進むとなったとき、周りの反応はいかがでしたか？

前から私を知っている人たちには驚かれましたね、「村井さん、どうしたんですか？！」って。意味がわからないのですが、「借金ですか？！」と言われたこともありました(笑)。

最初は広尾 1 丁目のマンションの一室で開業しました。家族は「何をやってもいい」と見守ってくれました。そのおかげもあって、ヒプノの道は順調に進みました。最初の 2 年は赤字でしたが、3 年目以降は黒字になりました。

― ヒプノセラピースクール開校のお話を聞かせてください。

もともと、アメリカで学んだことを、セラピーで使ったり教えたりするのに、日本でどのように広めていこうかということも考えていました。

はじめは、2〜3 人が入ったらいっぱいになるくらいのマンションの部屋で教えることをスタートしました。当時は、セラピストを養成するための学校というよりも、セッションを受けて癒やされて、自分も学びたいという方に教えていました。自分が癒やされた原理・原則は何だろう、できれば自分も同じように人の癒しのお手伝いをしてみたいと思った方が多かったようです。

教材は、所属していた団体の教材と、本を読んで、私自身が大事だと思う内容をピックアップして教えていました。私が海外で学んだ様々な内容のいいとこ取りをしながら、日本人にとってわかりやすい内容に変えていきました。その内容で数年教えたあと、本格的に作り替えました。

ヒプノセラピーも提供し、スクールも開校するうちに、近くのより広いスペースの３階建てのテラスハウスに移りました。そこはもと X JAPAN の YOSHIKI さんの事務所でした。そこにはセッション

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

ルームも３部屋あったので、私の教え子のセラピスト 3-4 人に手伝ってもらってセラピーを提供していました。

ただし、最初の頃は、部屋を借りることも難しかったのです。「催眠」ということで、なかなか OK が出なくて。「催眠なんて怪しい」とか、「受けに来るのも変な人たちなんじゃないか」とか、偏見がありましたね。今でも誤解や偏見があるので、部屋を借りるのは難しいかもしれません。

― 少し戻りますが、村井先生がアメリカでヒプノセラピーを学ばれたとき、すでに脳科学をふまえた内容が教えられていたのでしょうか？

私がヒプノセラピーを学んだとき、脳科学のかけらもなく、意識・無意識論がベースのヒプノセラピーでした。脳科学は自分で論文を探して、脳科学的なヒプノセラピーの技術を独学で学んでいきました。当時の日本には、ちゃんと脳科学に基づくヒプノセラピーができるという人はまだいなかったと思います。意識・無意識論に基づくヒプノセラピーを、教えられたことをただ教える、という感じでしたが、それでは足りないとわかり、自分で勉強しました。脳科学の本を読み、いろんな方の方法論を学び、そこから自分なりに考えて、工夫しながら、「こういう方法を使えないか？」、「こういうことをやったらどうか？」と考えていったのです。そして実際に練習で使ってみて「あぁうまくいった」と。

今度はそれを「なぜうまくいったのか？」、「脳科学的にどういうことだったのか？」ということをもう一回検証していきました。自分の想定・推測でやったことがなぜうまくいったのかということを、あとから脳科学の論文で理解できたこともありました。

さらに、私の中で脳科学の方法論が大きく発達したのは、やはり「記憶の再固定化」についてわかったときでした。井ノ口馨先生の「海馬の記憶を再固定化する」という論文を読んで、「あぁこれだな」と。そういうのを初めて知って、そこから脳科学的な切り口でヒプノセラピーを定義していこう、作ろうと、今までの意識・無意識論的なことから、脳科学的な考え方、記憶をメインにした「脳科学に基づく催眠療法」に切り替えていったのです。

会員の皆さんもすでに学んでいらっしゃる大脳と小脳の長期記憶の仕組み、つまり、記憶の書き換え、記憶の再固定化、そのときに記憶保持用タンパクが出るというメカニズムを知ったことが、私の研究においても大きかったです。それ以来、この記憶の仕組みをどう活用して癒しに使えるかを考えてきました。

これは当時に限らず今でも、アメリカの民間のヒプノセラピストたちには教えられていません。彼(女)らは、暗示療法とイメージワークを中心とした施術しかできませんので、記憶を書き換えたりする方法は心理療法をしっかりと学んだ公的な有資格者にのみ許される方法論なのです。

またアメリカでは、心理療法家でさえも、記憶の書き換えをしっかり扱える人はまだ少ないと思います。知識のある人もまだ少ないと思いますね。しかし、ソマティックセラピー的な研究をされている方は詳しいかもしれません。

村井先生の代表作『前世療法』と『悲嘆療法』

― 村井先生が開発されたヒプノセラピーの技法がたくさんありますが。

そうですね、私が作り上げて行ったものはいくつかあります。例えば、人格移動、包み込まれ法、悲嘆療法などです。しかし、私がポンと 1 から作り上げたわけではなく、すでにあったものの延長であり、先人が創意工夫されて作られたモノの上に作り上げたものです。

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

私自身、癒やしの方法論としての脳科学がわかり、メカニズムがわかってくると、「もっとこうしてみることもできる」と試す、実際にやってみる、そして使えるとわかる、という流れでした。実際に使わないとわかりませんからね。

人格移動は、ゲシュタルト療法のエンプティチェアや NLP でのポジションチェンジと似たような形を取りますが、似て非なるものです。エンプティチェアにはフロイトの投影理論を用いた分析など、それなりの理論があります。催眠状態で頭の中で向き合っている相手の中に入ると、脳内の稼働部位が瞬時に入れ替わり、相手の声で語り出したり、思ってもいない内容が語られたりします。

例えば、催眠に入らずにこれを行うと、クライアントは自分のお母さんになった「つもり」で「考えて」語りますね。交流するうちにお母さんの気持ちがわかってくるつもりにはなれます。心理療法の一環で、催眠に入れずにやるので、どうしても「お母さんになったつもり」として理性で考えます。

コミュニケーションをするとき、通常のカウンセラーは一方向のコミュニケーションしかできません。つまり、お母さんとの問題があるクライアントの場合、「たぶんこう思っていると思う」の連続で、最終的には介入するしかなくなります。「そうじゃないと思うよ」、「お母さん、こんな気持ちで言っているかもしれないよ」というように、癒しを導いていると言えます。セラピストの介入が前提になるということは、説得しないといけません。そうするとなかなか癒やしきれません。

一方で、催眠状態で人格移動をすると、お母さんの中に本当に入ってしまう感覚を味わいます。体験した人ならわかりますが、声が変わるのです。お母さんが語る。それを聞いている自分がいて、お母さんが語る内容に自分が驚く。

これを理性で自分の頭で考えたら、そういうことは起こりえません。自分で考えて自分で言うと「たぶん、お母さんはこういうことを言うだろうな」と。そしてそれを言う。だから驚かないし、自分の頭で考えて理路整然と語ります。

しかし、それでは癒やされません。お母さんの言った言葉に意外性があったり、「え！？」という驚きがあったり、「そうだったんだ！」という気づきがあるからこそ癒やされるのです。

人格移動で、お母さんの中に入ったら、お母さんが語ってくれます。催眠状態で別々の人間が、言葉のキャッチボールをする中で自然と癒やされていくのです。自分で理解して自分で癒やされていくのです。人格移動の経験がなければ、「こんなことできるの？」と誰でも驚くでしょうが、やってみると強力な効果がある技法だということがわかります。

― JBCH を創設するきっかけはどういうものでしたか？

実は、私自身、「催眠は怪しい世界でもある」と思っていました。まあ、今もありますけれど、人を欺いて利益を追求するような、インチキをやっている人が結構いる世界です。それはヒプノセラピーの世界も例外ではありません。

例えば、2013 年にヒプノセラピーを全く学んだことのない素人にヒプノセラピーを 2 日間教えてヒプノセラピストの認定証を出す、その 1 ヶ月後にインストラクター養成講座を学ばせてインストラクターの資格認定証を出す、さらにその 1 ヶ月後にアメリカからスカイプでマスターインストラクター養成講座を教えてマスターインストラクターの資格認定証を出す、ということを日本でおこなったアメリカの催眠団体がありました。それはつまり、ヒプノセラピーの経験がない全くの素人が、2 ヶ月後にはインストラクターを養成するマスターインストラクターになってしまうということです。

資格だけが欲しい人には好都合な話でしょうが、本当に実力をつけたい人には意味がないですし、無責任極まりない行為です。こうした資格商法を、その催眠団体のトップと私のかつての教え子が手を組んでやってしまいました。これは私にとってはかなりショックでした。私もその団体のマスターインストラクターでした。日本で名前の通った催眠団体でもこういうことをやってしまうのかと、ヒプノセラピーの世界の現実を突きつけられた気がしました。

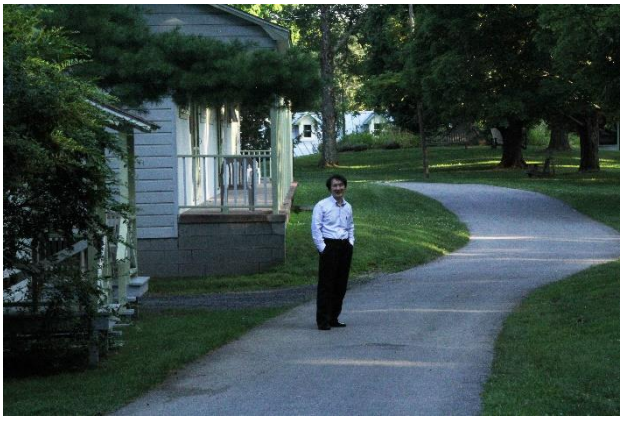
ちなみに、それは日本でしか行われなかったことです。日本人は文句を言いませんので。アメリカで同じことが行われたら、訴訟になるかもしれません。本来、その催眠団体でインストラクターになるには、

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

ヒプノセラピストとして少なくとも１年の経験があることが最低の条件でした。またマスターインストラクターについては、インストラクターとしての教える技術や充分な経験に加えて、インストラクターを教えられるだけの実力と人間性があって初めて、本部から勧められるというもので、その講座に参加するには 15 冊の原書を読んでから受けるということが必要でした。もともとあったルールを団体のトップ自らが破って「ビジネス」をしたのです。

私はこのトップに意見をしましたが、返事は来ませんでした。最終的に私はこの団体から脱会しました。

この出来事は、私が一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会(JBCH)を創る強い動機になりました。元々別名の催眠団体を立ち上げてはいましたが、早くちゃんとした催眠団体を作って、ヒプノセラピストが安心して活動できるような環境を構築したいとの思いで創設しました。ヒプノセラピストとして、あるいは、ヒプノを学び興味を持つ方が、お互いに助け合ったり、理解し合ったり、協力し合うことができる協会にしたいと考えています。



Omega Institute にて(撮影・石原均)

― 村井先生から見た、JBCH の強みとは何でしょう？

脳科学に基づいた内容を教えていることです。かつてのように、意識・無意識をベースにセッションしようとすると、やはり無理があると思います。「意識って何？無意識って何？」セラピストもよくわからないから、説明できないでしょう。でも、記憶のメカニズムを使えば、理解が深まります。用いる方法論も脳科学に基づいた方法論なので、癒しの精度が上がっていきます。だからセラピストとしての自信もつくし、セッションを受ける方も「この人はできる」と認めてくれるのです。

ちゃんとした内容を学んでいない人は、もう上から目線で自分の価値観を植え込んだり、「あなたはまだ魂の成長ができていないからできないのだ」とクライアントさんに責任をなすりつけたりします。「この方法でできなかった人は今までいない、あなたがおかしい」と。実際にそういうことを言われた人がいました。そういう、してはいけないことをして、クライアントさんを傷つけるセラピストになってはいけません。

最初、時間はかかるかもしれませんが、しっかりと学ぶ、真似ぶことで、そのうちに、だんだんとうまくなっていきます。本当に癒しのレベルが上がり、クライアントさんは自然に癒やされていきますから。

ヒプノセラピストが潜在意識に見事につながって自分を磨き続ければ、ミルトン・エリクソンのように、ただもう存在するだけで癒やされてしまうくらいの「癒しの権化」になるでしょう。存在の在り方 « Way of Being » が大事です。

― 村井先生ほどの経験は私にはまだありませんが、私も教えていただいたことを忠実にやるだけでセッションが成功しています。

そうですね。当然のことながら、ヒプノセラピストは技術を身につけなくてはなりません。それができたら、あとは、セラピストの存在です。どんな存在であるか。自分自身の生きざまであり、存在の在

ワイス先生ご夫妻　新幹線車中

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

り方が大切だと思います。私は、セラピストは誠実で愛に満ちた存在であるべきだと考えます。敬愛するブライアン・ワイス先生はよく”Love, Compassion. And Kindness（愛と思いやりと優しさ）”と語っておられますが、ワイス先生にお会いすると、「存在が人を癒やす」という言葉の意味がよくわかります。

― 最後に、会員の皆さまへ、メッセージをお願いします。

ヒプノセラピストにとって価値があり、ヒプノに興味を持って勉強した人が JBCH の会員でいることでメリットを享受できる催眠団体でなければ意味がありません。形だけを作るのではなく、ヒプノセラピストにとって本当に役立つ団体にしていきます。

今は Zoom でも勉強会・練習会を開催しているので、遠方の方にもぜひ参加していただきたいと思います。そして、今の状況が落ち着いたら、私も全国あちこちに出向きたいと思います。Zoom でお会いした方たちに、実際にお会いできることを楽しみにしています。

― 村井先生、価値ある貴重なご経験についてお話しいただきありがとうございました！

JBCH 会員限定 Facebook グループについて

JBCH では、セラピスト同士の情報交換ができるオンライン上の交流の場として、会員限定 Facebook グループを提供しています。本ウェブマガジンの配信と同時に、グループへの参加を受け付けますので、どうぞ楽しんでご参加ください。以下、Facebook グループへの参加方法です。

【会員限定 Facebook グループへの申請方法】

１．下記 URL をクリックします。
▼申請はこちらから
https://www.facebook.com/groups/642888666917500
２．『グループへ参加する』ボタンを押します。
３．質問が表示されますのでお答えください。
＜質問＞
・JBCH に登録しているお名前
・JBCH の会員番号（こちらはもしわかれば）
を教えてください。
4. 事務局側で確認＆承認作業を行いますので、承認されましたらグループへご参加いただけます。

※秘密のグループのため、Facebook を使っている他の人からは、グループに参加していることや投稿内容が分かりません。どうぞ安心して、ご参加してください。

※JBCH 会員限定のグループですので、リンクの共有はお控えください。

※まだ Facebook のアカウントをお持ちでない方は、アカウント作成のうえ、コミュニティにご参加ください。

※こちらは任意のものですので、SNS が苦手な方は無理に参加されなくても大丈夫です。強制ではありませんので、ご安心ください。

※ご利用の Facebook アプリのバーションによっては操作方法が異なりますため、ご了承ください。

※その他、PC 操作などの技術的なご質問にはお答えできかねます。あらかじめご了承ください。

※その他のお問い合わせにつきましては、下記宛先までお願いいたします。

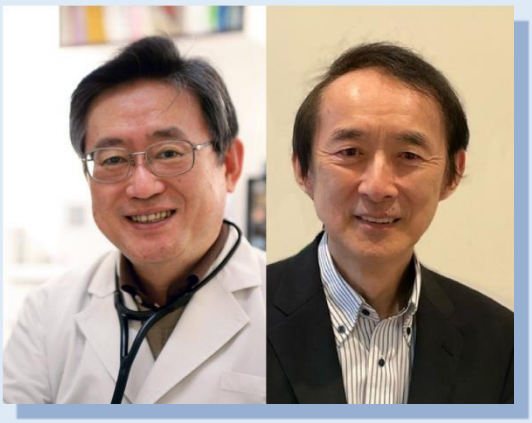
宛先：newshypno@gmail.com

【スペシャル対談】

【スペシャル対談】 JBCH 理事兼医師 石原均×村井啓一

ヒプノセラピーの技法を活用した【傾聴・理解・寄り添い】の診療を実践。かつての左脳派から『イマジン』の世界を生きる臨床医・石原先生と、堅い絆で結ばれた村井先生の対話とは。

今回、JBCH 会報誌『News Hypno』の創刊号では、JBCH 代表理事の村井啓一先生と医師である JBCH 理事の石原均先生の対談インタビューをお届けさせていただきます。この会報誌の目的の一つが会員の方のヒプノセラピーの技術向上や学びを深めることなのですけれども、それにあたって各界でご活躍されている方のお話をお聞きしてみたいというのがあります。
特に医療の専門の知識をお持ちで、かつ診療でもヒプノセラピーを実践されている方のお話は、私たちにもすごく学びになるのではと思い、今回石原先生にお越しいただきました。
（インタビュアー： 伊藤若菜）



＜石原均先生プロフィール＞
総合内科専門医・循環器専門医
日本伝統美座療法治療家
日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）インストラクター
日本催眠学会評議員

― まずは最初に少し石原先生にインタビュー形式でいくつか質問をさせていただき、その後で村井先生との対談に入っていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

ありがとうございます。ということで過分なご紹介をいただきましたけれども（笑）村井先生からは「ひとちゃん」と呼ばれています。私よりも皆さんのようなセラピストの方が経験豊富で、むしろ私は色々教えていただきながらではありますが、医療との接点ということに関しては私の分野だと思うので、自分の経験からお話しできたらと思います。

― それでは石原先生ご自身の簡単な経歴や、お医者様からヒプノセラピストになるまでをお話しいただけますか？

そうですね。昭和 32 年 5 月 27 日生まれで、今年でもうすぐ 65 才になります。昭和 58 年に名古屋大学の医学部を卒業しまして、それから愛知県にある岡崎市民病院に研修医として入りました。救命救急センターが出来たばっかりで、ものすごく忙しかったです。実は救命センターで 20 年間働きながら、一生懸命働いているのに患者さんが増えていってしまう、そういったジレンマを抱えていました。

もっと患者さんの予防のためのことをした方がいいんじゃないかと。そこで平成 15 年になって私もちょうど 46 才という、現役で働くにはそれなりの歳になっていましたので、岡崎市内に石原クリニックを開設しました。ですが、開業してもやはり同じで・・・。

予防のために手を尽くしているはずなのに、なかなか患者さんが良くなってくださらない。ということでいろいろ悩んでいたら、今度は私が体を壊してしまいましてね。ある日起きたら体が全然動かない、というような状況になってしまいました。

村井先生の講義にて

その時に出会ったのが瞑想と、私の本棚にあったブライアン・ワイス博士のCDブックです。この日本語版を毎日のように聴いていました。すると自分の心が癒されたと共に体調も良くなって、完全に復活した時に、このCDを調べていたら村井先生に行き着きました。そして2008年に村井先生が福岡県で出張講座をされたときに、愛知県から福岡県まで行ってベーシックコースを習ったのです。

その時のあまりの感動に、もうこのまま最後まで習おうということで、2年間でインストラクターコースまで取らせていただきました。

― お体を壊されてから回復していくまで、実際にご自身のお体や心でどのような変化を体験されたのでしょうか？

体を壊した時はいわゆる自分の身体を自分がコントロールできないような、そんな感覚です。例えば、脳梗塞やパーキンソン病を思い浮かべていただくといいのですが、自分で何かしようと思ってもその行動がうまくできない。とてもじゃないけれど、診療の仕事ができないので、休診の案内を書こうと思ってマジックを持っても、書けないのです、字が。

３ヶ月間は身動きも取れず、食事も砂を噛んでいる状態で、16kg痩せました。ですので、毎日リクライニングシートに座りながら、瞑想とブライアン・ワイス博士のCDブックを聴いていました。一番効果的だったのはリラクゼーション法ですね。毎日自分自身をリラックスさせ心が癒えてくると、段々と体も癒えてきて、完全に体調も戻ってきたのが半年後くらいですね。

診療時の一コマ

心に関して、それまでは自分は医学に携わり、自分も科学者の端くれのつもり、いわゆる左脳人間でした。それがヒプノセラピーを習い催眠状態に入った時に、自分の心の中がいっぺんに変わったのです。

潜在意識に触れ、深いリラクゼーションの状態を経験することで、こんな世界が自分の中にもあるのだっていうことに気がついて。そういった心でいれば、心も体もすごくいい状態でいられるし、自分の仕事にも取り入れたいなと思ったんです。

― 現在、患者さんへはどのようにヒプノセラピーのエッセンスを取り入れているのですか？

現在の短い診療時間で本格的なヒプノをするのは難しいので、村井先生のおっしゃる【傾聴・理解・寄り添いの技術】を取り入れています。

例え話をすると、医者には３種類いて、体調が良くなるアドバイスをする医者、わるくなることを伝える医者、セラピストとしての医者というのがいます。

良いアドバイスというのがあったとしても、本当に患者さんがそれに向かって動き出せるかはわかりません。セラピストとしての医者は、「どうしたらよくなると思う？」「あなただったらどんなことができそう？」という答え・気づきを引き出す医者であって、私はそこを診療に取り入れるよう心がけています。

患者さんの中には「あの一言でやる気になりました」と言ってくれる人が増え、寄り添いの技術の大切さを感じています。

あとは、フリーでイメージしてもらうセラピーのようなものですね。

例えば仕事に疲れて生きがいを持てない方が、もう一度仕事に戻りたい。でもどうしたらいいか分からないという方へ、今までで一番自分が楽だった時、輝いていた時、リラックスしていた時のイメージを思い浮かべてもらいます。

それを一通り味わってもらい「こんな気持ちでいられたらいいと思う？」と話し、「Yes」ということであれば、「自分が選択できる未来は無限にあるから、自分らしく生きていける方法を選択していこう」と落とし込んで行きます。

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

余談ですが、実はこの２～３年、新規の患者さんに安定剤や睡眠薬を一切出していないのです。

ですからこのように、セラピーで自らを癒せるというヒプノセラピーで習ったことを活かしています。

それともう一つ私の中でセラピストとして心がけていることが、【何も足さない、何も引かない】ということですね。セラピスト自身の考えをクライアントに押し付けたり、クライアントの言葉を否定したり、修飾したりすることがあってはいけないので、言葉をそのままに受け取って理解するということが一番大切かなと思います。

― 素晴らしいですね。その中でも印象的だった事例はありますか？

はい。事例紹介は学会でも発表したものなのですが、うつ病の向精神薬を飲んでいた女性の方が、年齢退行療法・GIFT・悲嘆療法を通して、薬を飲まなくてもいい状態まで回復したという事例です。

この方は 6 年前に息子さんを事故で亡くされているんですね。その後パニック障害になってしまい、うつ・突然の動悸・めまい・予期不安・広場恐怖といった症状がおありでした。

そこで最初のセッションでは、段階的リラクゼーションで催眠誘導をし、その後でいきなり辛いイメージに降りるのではなくて、まずは一番自分がイキイキとしていた頃の自分に降りて、一番自分らしいエネルギーを取り戻してもらいます。その方は高校生の時に、海辺で友達と遊んだ時の自分をありありと感じてもらい、もう一度エネルギーを取り戻してもらいました。

そしてもう少し遠い過去、自分の癒やしたい過去へ行きました。この時には 3 歳の時、公園でお姉ちゃんと遊んでいた時に置き去りになったという不安と寂しさを感じていたので、「誰に迎えに来てほしい？」と聞くと「お母さん」ということで、お母さんに迎えにきてもらい、幸せなインナーチャイルドになりました。

次に GIFT の方法で、娘さんと北海道の街を旅行してみたいけれども、息子さんが亡くなられたことで実現できていないということで、実現するイメージをしていただきました。この時には薬は半減することができたのですが、まだ完全にパニック発作が治まらない状態でした。

そして半年後、亡くなった息子さんの裁判の証人として出なければならないということで、息子さんの死を受け容れるために、悲嘆療法を受けに来られました。

そこで元気な頃の息子さんと出会って、「裁判の時も一緒にいるから大丈夫だよ」という言葉をかけてもらい、それから裁判に出た時、実際に息子さんの魂がそばにいる。そんな感覚で裁判を終えることができたそうです。そんな体験をされてから、全てのお薬を飲まなくて済むようになったのです。

いまだに８年ほど私の所へ通ってくださっているのですが、すごく明るく今の人生を楽しんでいる、そんな方の事例を紹介させていただきました。

― 素晴らしい事例ですね。もしヒプノセラピーを使わなかったとしたら、どのような治療になると思われますか？

そうですね、もしヒプノセラピーに出会わなければ、左脳人間で「〇〇した方がいいよ」とアドバイスしてしまうと思います（笑）。それがその人にとって有用なアドバイスになっているかは全くわかりませんので、やはり自分自身が潜在意識の仕組みを理解し、人に寄り添うことが大切じゃないかなと思います。

― 医療従事者である石原先生から見て、ヒプノセラピーが更にこうなったらいいなということはありますか？

やはりヒプノセラピーは体験が 100％の世界かと思います。フロイトが無意識を発見して 100 年以上になりますが、いまだに精神療法の一つとして普及してこない理由になっているかと思います。ただ実は、平成 30 年に心身医学療法として、ヒプノセラピー、レイキ、エネルギー療法などが、医師の診療に限り保険が適用されることになりました。

また最近では、神奈川歯科大学大学院にて、川嶋先生が日本初の統合医療学講座を開設されたので、そういったところで普及していけたらいいですね。

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

そして体験された方で、ヒプノセラピーを否定する方はほとんどいないと思いますので、やさしい世界が広がっていったらと思います。

「命の育て方授業」の登壇時

― 石原先生が感じられるやさしい世界とはどのようなものですか？

今はウクライナ情勢のことがあり、ちょうどジョン・レノンの『イマジン』が話題になっていました。本当に国もない、所有もない、共存共栄を楽しむいわゆるワンネスの世界ですね。

わたしとあなたではなく、みんなわたしたち。だから、誰かが困っていたら助けてあげるという感覚でなく、一緒にこの世界を楽しもうよという感覚です。そういう風になっていくと、もっとやさしい世界が実現できるんじゃないかなと思います。

そのために私自身はいつも笑顔でいること。いるだけで安心できる存在でありたいです。まずは傾聴・理解・寄り添いをするにしても、側にいるクライアントさんが話しかけてくれないと、最初のスタートが始まらないので。寄り添うと同時に、寄って来てくださるには、やはり笑顔かなと。人は見た目が80%と言いますしね。ですから常にそんなエネルギーでいたいですね。

― 診察中に催眠状態になっているとお聞きしましたが、どのような良いことがありましたか？

以前は患者さんの数が一日 70 名くらいだったのです。それでも一般開業医としては多い方だったのですが、毎日真剣に左脳で話を聴いて、アドバイスをするとかなり疲れていたのです。恐らくそれで体調を壊したと思うのですが。そこから催眠療法を習い、自身も常に催眠状態・変性意識に常にいられると、何をしていても疲れない、心が平安な状態になりました。

すると患者さんの対応がもっとできるようになり、今では一日平均 150 人。倍以上に増えました。インフルエンザの時期は一日 250 人くらい診たこともあります。それなのに全然疲れないのはなぜかと言うと、交感神経が緊張していないから。ヒプノセラピーを習った効用の一つですね。

あともう一つの効用は精神年齢が 38 才から歳を取っていません。永遠の 38 才です（笑）。

― ここからは村井先生に参加して頂きます。村井先生は催眠の効能をどのように感じられていますか？

村井先生：ひとちゃんの体験に似たようなことは私も日々体験していますね。朝オフィスにきたときよりも夜セッションを終えて帰るときの方が心身共に楽になっているのです。

講座の時も同じです。私も結構歳をとりましたが、気持ちは今も 30 代です（笑）。ヒプノセラピーで日に日に若返っていく、歳を減らしていくそんな感覚で生きています。

― 村井先生と石原先生とでは、どのような意見交換をされていらっしゃいますか？

石原先生：同じ潜在意識の世界に入ってしまうと、ある意味では言葉での議論がいらなくなってきてしまうんですよね。村井先生の発した言葉の背景に、どのような気持ち・考えがあるのかなということが掴み取れてしまうので。そして私が何かを言えば、村井先生も理解してくれる。そういう意味で信頼できる関係です。ですから学会などでお会いすると、世間話か冗談半分で悪口しか言っていませんね（笑）。

このツーカーになる感覚が潜在意識のすごいところですけれど、もっと掘り下げていけばアカシック・レコードとか人類共通の意識につながり、だんだんと言葉のいらない世界になっていくんじゃないかなと思います。

患者さんに関しても、言葉以外の仕草、手や目がどう動いているか、喋り方で、患者さんがどのよう

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

な状態かが手に取るようにわかるようになりました。診療ではアドバイスではない、こんなことを期待しているのかなというメタファーの投げかけをしたりもします。

例えば先日、100 才の女性の方が「私はもう長生きしたくないから、先生一服盛ってくれ」なんて言うんですね。でも肺炎のワクチンを打ちに来られていて、ということはあと５年は生きたいのだなと感じた訳ですよ。だから「今度打つときは 105 才だよ」とお伝えする。すると笑いが起きて「105 才まで生きろということだな」と読み取っていただけるんですね。そんなことを直感で投げかけたりもします。

― すごいですね。 どれくらい経験を重ねてそのような感覚になられたのですか？

石原先生：最初のうちは潜在意識状態でやっているつもりでも、自分の顕在意識が持ち上がってしまってなかなかその感覚にはなれなかったです。やはり自分も潜在意識の状態で、クライアントさんと最初から最後まで一つの物語を共有できた時、そういった感覚になりました。ですので、数ではなくその体験をいくつも重ねていくことが大切で、それはベーシックコースやアドバンスコースを受けられている方でも、十分その感覚になれると思います。

― 村井先生から見られて、石原先生はどのような印象でしょうか？

村井先生：福岡でお会いした時のことが強く印象に残っています。あの時はまだしんどそうな感じがあったのですが、学びながらだんだんと良くなっていくのが見て取れましたね。

ひとちゃんはすごく理解が早いし、人に対する思いやりを持っていらっしゃるので、本当にヒプノセラピーが合っているんだなという風に思っていました。ドクターでちゃんとヒプノセラピーができる方は少ないので、本当に奇特な方ですね。

― 現在の村井先生の講義は、脳科学から潜在意識に結びつけて教えてくださるのが印象的ですが、石原先生の時代は学ばれてみていかがでしたか？

石原先生：実は私たちの時代は、まだそこまで脳科学が発展しておらず、スピリチュアルに寄っていました。そんな中で私が科学的に捉えられたのは、100 年前にフロイトが発見した『無意識』があったからです。科学的において存在を証明するというのは難しいこと。その発見がヒプノセラピーのベースになっているので、科学者としての私でも学ぶことができました。

しかし、実際に体験をしていくとそうではなく、非常に右脳的でありスピリチュアル的であることが深まってきました。最近ではスピリチュアルな孫まで生まれてきて、何も抵抗がないのですよ（笑）。

ですから将来的には、村井先生が説明くださる脳科学のところとスピリチュアルが、どこかで必ず結びつく時がくると思っています。そんな時を楽しみにしながら、両方に足を入れてヒプノセラピーをしています。

ブライアン・ワイス博士のワークショップにて

― それでは、ヒプノセラピーを通じてこうなったらいいなという世界観はありますか？

石原先生：こうなったらいいなというよりは、もう決まっているものです。

それはさっきお話しした『イマジン』の世界、ワンネス、映画：『美しき緑の星』のような世界。

あの世界観が命を持つものにとって理想的だと思います。ですから我々はまだ未開人で、科学に頼ったり、色々な経験をした後に、最終的に行き着くのはあの世界だと思います。何もいらない、一緒にいる人が同じやさしさをもち、命ある限り幸せな気持

ちになる世界ですね。人類はまだ原始人で発展途上の生物なんです。

村井先生：そうですね。マズローが言っているような個を超えるということ。自分や自分の家族の幸せはとても大事ですけれど、それ『だけ』を目指すのでなく、人生の目的・意味は人を幸せにすること、この世界を幸せにしていく、愛を持って生きること、大きな視野・心を持って生きることじゃないかなと思っています。ヒプノセラピーはそのために心のあり方を観るツールであり、コミュニケーションです。

ですから自分の内側と外側、宇宙と深くコミュニケーションを取ること。自分が内側にどれだけの知識・知恵を持っているか、その人をどれだけ深く理解できるか、お互いに助け合っていくいたわる気持ち、それらの基本がヒプノセラピーの根底にあると思います。

人間というのは不可知な世界に生きていますね。なんでこのような地球に生きているのだろう、とか。宇宙っていったい何だろう、とか。この何十年かすごく科学が発展してきて、いろんなことが見えてきましたけど、まだまだ見えていないことが圧倒的に多いのです。まだまだ未科学の分野がたくさんあり、無限の世界に何があるのかは、我々にはまだまだわからないのですね。

そして未知の領域ともうわかっている領域との間の接点、ここにスピリチュアル的なよくわからない世界がある訳です。で、ここをどう捉えて生きるか。ここを利用して人の心を楽にすることもできるし、人を欺くことだってできる。この未知の分野こそ人が不安や恐れを感じたりして悩むところなのです。

ワイス博士ご夫婦と石原先生

その不安や恐れを解消する役割を昔は宗教が担っていたのですが、今は個々人が自分の中に自分なりのスピリチュアル的な解決策を持って生きるように変わってきました。その接点から生じる不安要素をどう捉えて、どう癒しを導くお手伝いをしていくのか・・・、ヒプノセラピーはその領域を扱える稀有な心身療法だと思います。

― 今の時代、自分のミッションや使命を考える方は多いと多いますが、お二方はどうお考えでしょうか？

石原先生：5年か10年前だったら違うことを答えていたかもしれませんが、今なら、ミッションを追い求めれば求めるほど、ミッションらしいものがどんどん薄れてくるものと思います。今までヒプノセラピーを通して、色々な人の人生や物語、前世、ハイヤーセルフの世界を垣間見ることによって、自分のミッションがぼやけてくるのです。

そうすると私のミッションってなんだろう？と最終的に行き着いた答えは、『わたしがわたしでいること』。

私ができることは私しかできないし、私のできないことはそれをやる方がどこかにいるはずなのです。そういう人・・、今だったら地球には77億人いますよね。全宇宙だったらもっといると思いますから。

そういう人達が生まれもった命の意味を考えて、その人がその人の役割を果たすことによって、どんどん素晴らしい世界になっていく、そんな気がしています。多分生まれ変わっても、また自分に生まれてくる、自分にしかなれない、これしかないのだと思います。

村井先生：今おっしゃったことは私もよく分かります。自分のミッションってなんだろう？と考えた時に、自分らしく生きるしかないなと思っています。自分の中で信じることをやっていきたい、信じない・してほしくないことは自分にも人にもしない。これは小さい時に、近所の6歳上のたけちゃんというお兄ちゃんから教わったことなのですけど、私はそこから変わってないのですね。

人に優しくしなさい、自分がして欲しいことを人

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

にしてあげなさい、という教えが私の中でずっと生きています。そして自分のミッションってこれだと思っています。だから人を騙す人間が大嫌いなのです。

人は社会的な動物ですので、一人では生きていけません。人と触れ合いながら、色々な生き物と触れ合いながら生きていくのです。その中で周りの存在を尊重して生きることが、一番基本だと思います。その交流のためにその方を慮った交流の仕方＝コミュニケーションがありますから。そしてコミュニケーションをどう生かして生きて行くのか、に行き着くのです。最終的には自分自身の『存在のあり方』が大切だと思います。

― 数年前から始まったコロナ禍や、今の戦争の状況ですとか、世界中に色々な不安、色々な感情が渦巻いていると思います。そういった今の時代にヒプノセラピーはどう役立てられると思いますか？

石原先生：もし、ちゃんとしたセッションとして提供できる時間があるのであれば、その方に寄り添って、どんな不必要なもの、不安、怖れを持っているのか。今の時代であれば本来は要らないはずだし、要らない世界を目指していかなきゃいけない。でも実際にはコロナであったり戦争であったり、天変地異や異常気象であったり、そういったことで皆さんは安心感を奪われていってしまっている。

だから我々ができることは、不安や怖れは本当は必要ないんだよということ、ヒプノセラピーあるいはヒプノセラピー的な潜在意識の状態を、いわゆるインナーピースですね。心の中に常に平和があるということをしっかりと誰もが認識していければ、過剰反応からくる不安や怖れをというものが無くなっていきます。

例えばコロナも、あまりにも情報が多すぎて、情報の津波に皆さんが呑み込まれていくというのが今の世界の状態ですから。例えば、コロナで重症化するというのは不幸なことですが、結局は自分の中の過剰反応からきているんです。犬や猫も同じように感染していて、巷でバタバタコロナで死んでいるかといったら、ほとんど死んでいないですよね。犬や猫には恐怖もなければ不安もない。感染して熱が出て数日経てばケロッとしている。

だからその過剰反応を上手にコントロールできれば、もっと普通の風邪のように扱えるようになっていくだろうと考えています。今、私のクリニックでもコロナのことで非常に不安になって、お越しになる方もいらっしゃいますが、私がやることは具体的な事例と共にただ安心させるだけです。

実は私のクリニックには、3,800 人の患者さんが通っていますが、コロナで亡くなっている方は一人もいません。「私、重症化するはずだったんだけど」という透析、肺気腫、糖尿病の患者さん、誰一人重症化していません。何がそうさせているのかを理解できれば、つまり自分の体を蝕んでいるのは不安とか怖れというネガティブな感情だということに気づけば、何も怖れるものはありません。

ということで、何があろうと先ほど言ったような自分のミッションを全うすればいい。

ですからヒプノセラピーで得た心の状態を、多くの人に伝染させていくことが一番いいのではないかと思います。

また、自分が受けたヒプノセラピーのセッションの中で、すごく印象的なものには【８つの前世】というものがありました。そしてその８つの前世の中に流れているテーマは１つで、その前世の中で必ず伴侶か私のどちらかが先に死んでしまうのです。

その中に流れている物語を自分で見て、今ここで、これまでのカルマを解消すると言うか、今の妻と２人で、本来の一生を添い遂げる。それが今の自分のテーマなんじゃないかなと思いながら今世を過ごしています。

映画『天使にラブソングを』の中で歌を唄うシー

趣味で撮影している宇宙写真「馬頭星雲」

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

ンがあるのですが、「誰もがみんな、本当に大切にしなければいけない人を間違えている」という歌詞があるんですよ。だからもし自分が大切にする人を、本当に大切にできていれば、どんな人生であろうと幸せなのです。いつ死のうが、どこでどんな別れをしようが。そして実際に見た８つの前世で、何回かは今の妻と一緒の人生を送って、今巡り合っているのです。

だから二人で大切にするもの、人と生きる上で大切にするものを間違えずに生きることが、この世で生を受けている自分にとって一番大事にすることだと思っています。ここで今世をクリアできると、来世は違うテーマになるのかなと思って楽しみにしています。

村井先生：今の時代、コロナのおかげで世の中が変化していますね。私の知り合いのお子さんが中学生で、コロナになってから二年間ほとんど授業がないのですね。学級閉鎖になったりしてほとんど Zoom で過ごしている子供たち。とても大事な時期に人との交流がないことが、大きくなった時にどういう影響を与えるのか。それをとても危惧していますね。

それがない状態だとしても、少子化・生涯未婚率が男性でも 25%、女性で 15%という状況になっています。これはなぜかというと、コミュニケーションがうまくできないことが一つの要因だと思います、男性も女性も。それが文科省の教育の中にないので誰かがやらないといけない。

今の日本の状況を改善すること、ヒプノセラピーの本質的な役割を考えたときに、コミュニケーションをしっかりと教えるということ。男女のコミュニケーションの違い、子供に対するコミュニケーションで注意すべきこと、そういうことをしっかりと発信していかなければならないと思っています。これが、私の余生でやっていきたいなと思うことの一つですね。

石原先生：これはもう一つの流れなので、村井先生がおっしゃる通りだと思うのですよ。私たちは独立した存在として、お互いの気持ちを知るには、言葉によるコミュニケーションしかないというのがありますから。その言葉の裏にある本質を私たちセラピストがきちんと理解して、本来あるべきコミュニケーションというものを伝えていくというのが、ヒプノセラピストの大きな使命だと思います。

私は臨床医で患者さんに言葉でそれらを伝えたり使ったりする立場、村井先生はヒプノセラピーを教えられる立場、ということを大切にしていきたいと思います。その言葉を伝えていくには顕在意識ではできないのですよ。潜在意識の状態、自分が催眠状態で、自分の潜在意識の中から湧き上がってくる言葉を相手にお伝えすることによって、初めて起こってくること。

その言葉に患者さんが共鳴することで、初めていいコミュニケーションが生まれてくると思います。「先生のあの日のあの言葉が、私を変えた」なんてことを言ってくださる患者さんも、ありがたい話でいらっしゃいます。そんなことを一つ一つ増やしていきたいと思っています。

患者さんの言葉に励まされることも

― これからヒプノセラピーを学ばれる方へメッセージはありますか？

石原先生：村井先生の前でおこがましい話なのですが（笑）、私の学んできた体験になるのですが、やはりテクニックはゼロではありません。頭で考えて覚えてできることではないので、ある意味スポーツと同じように、体で覚えていくことですね。そしてまず最初にやっていただきたいことは、『マネること』。

この人のセッションは素晴らしいなと思うものは、マネすることから始めていただきたいなと思います。マネすることから始めて、徐々に徐々にその自分のスタイルを築いていくことからしていただくと、比較的早道なんじゃないかなと思います。

とにかくたくさんやってください。癒やそうと思わずにやってください。【傾聴・理解・寄り添い】

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

というのは作為的であるのではなく、そういう状態であるということを体現していただきたいです。ただそこまでいくには、まずマネをすること。それをやっていくうちに、本当に意味での傾聴・理解・寄り添いということができるようになっていきますよ。

村井先生：『マネること』が大切ですね。そして心・技・体を整えること。癒やしてあげようとしない、『存在のあり方』を身に付けることも大切だと思います。

どういうふうに自分がその人の前で存在しているか。それが人に影響を与えるし、人の心を揺さぶります。ですから自分自身が意識してクライアントさんに影響を与えようとするのではなく、クライアントさんがご自分の中にあるものを自分で引き出せるような環境を一緒に作っていくことが大切です。クライアントさんの中に何があるかを聴きながら、確認しながら。それをひとちゃんは実践できているので、ひとちゃんからセッションを受けられる人はラッキーです。

― 今後の展望についてお聞かせください。

村井先生：願わくば、ひとちゃんが教える側に立って、そういう人を養成するようなことをしてほしいですね。世界中を探してもそんなことをできているお医者さんは少ないと思うので、日本発で世界にどんどん発信していってほしい。体験を本や動画にして英語で。私はそれを期待しています。

石原先生：とても耳が痛い話ですね（笑）。実際にやっていきたいことなのですよね。ただ私に一つ欲があるとしたら、完成度の高いものをつくりたいということがある方、私にしか書けない、つくれないものをやっていきたい、という言い訳をしていますけど。

ということで、どこかでもう一度しっかりとしたセッションをしたり、講座を始めていきたいです。本や SNS のメディアを通じても自分自身が得たものを発信していきたいと思いますので、村井先生、長い目で見てください。

村井先生：ひとちゃん、私も最初の本を書くときに、自分しか書けないものをと考えて何年も考えていたら、5 年、10 年と経ってしまったのです。これをしていたら人生終わるなと思ったのです。これは無理だ、いつまで経っても終わらない。だから【今】の段階のものを出すしかないと思うようになったのです。それで本を出しました。

当然、出した内容は当時の自分のものですから、1 年経ったら違うなと思うし、5 年経ったら全然違うなと思うわけです。変わらないものもあるけれど、どんどん自分が変わるから、これ！というのは無理なのです。だから今の段階で出していくしかない。その見切り発車というができないと、もう来世、来来世になっちゃいますよ（笑）。

石原先生：見切り発車します（笑）。

村井先生：出しましょう！

― 石原先生、村井先生、たくさんの素敵なお話しをお聞かせいただきありがとうございました！

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

【JBCH インストラクターインタビュー】第1回　山田美妙

「自分とのコミュニケーションを整える」銀行員・看護学校の講師など豊富なキャリアを経て、ヒプノセラピストへ。広島・尾道で 36 年間、主婦から議員まで幅広い層に愛される、美妙先生が変わらずに大切にしていることとは。

全国で活躍されている JBCH 認定ヒプノセラピーインストラクターの方をゲストにお迎えし、その豊富な知識と経験をもとにさまざまな角度からお話を伺うインタビューを連載でお届けします。初回のゲストは広島県尾道市で活動されている（株）セプルミエール代表の山田美妙先生をお迎えしました。

（インタビュアー：辻口真紀）

＜山田美妙先生プロフィール＞

広島銀行勤務を経て
尾道市医師会看護専門学校、准看護学院心理学講師
尾道市医師会看護専門学校カウンセリング室担当
尾道市市立病院カウンセリング室「心の相談室」担当
日本教育カウンセラー協会認定カウンセラー
日本教育カウンセリング学会会員
日本催眠学会評議員
日本臨床ヒプノセラピスト協会認定講師
国際催眠連盟認定講師
TA（交流分析）認定トレーナー
米国 NLP™協会認定トレーナー
ヒューマンアカデミー校中四国エリア心理学講師（交流分析、NLP, ヒプノセラピー）
エフエムふくやま放送レギュラー番組出演中
私立各種学校教職員連盟認定洋裁教師
2016 年 5 月　村井先生尾道前世ワークショップへご招待
ブライアン・L・ワイス博士前世プロトレーニング終了
2018 年 4 月　ワイス博士日本公演時、島根県出雲大社にワイス博士ご夫妻をご案内
有限会社　ニシマキ産業　専務取締役
株式会社　セプルミエール　代表取締役
セプルミエール校代表
2021 年 12 月　『ことばの花びらをあなたに － 幸せへの処方箋』を上梓
商標登録３種

― 美妙先生は活動を始めて今年 36 年目を迎えられたということですが、どのようなご活動をなさってきたのですか？

法人を立ち上げる以前は奉仕活動が多かったように思います。カウンセリングは銀行員時代からで、最初は恋愛問題が多く、自分がどんな人間かを知りたい人も沢山いました。当時は姓名判断が主となり、行員も 80 名くらいの方々がいて噂が広まって様々な相談が入ってくるようになったのです。

私の言葉がその人の人生を変えることや、人はネガティブなものを先にキャッチすることがわかってきて、まずはストローク（承認）をすることに気づかされました。承認をしてその人の意志を尊重しながら、ネガティブなものを伝えていくという流れでした。多くの人との関わりの中で様々なことを教えてもらいました。

その活動を通じて、カウンセリングの勉強をすべきだと感じ、まず始めたのが産業カウンセラーでした。そこから教育カウンセラー、アサーション、フォーカシング、NLP、TA など、休日を利用して学びました。基礎心理学の必要性を感じて、49 歳で通信大学に入学しました。

尾道で初めての学童保育を立ち上げる話があり、手伝いに来てほしいと依頼がきて何か意味があるのだろうと思い銀行をやめて、学童保育立ち上げのお手伝いをする為に保育園に関わったのです。

0 歳の子たちのお世話のお手伝いをして、ひとり

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

ひとりが全く違う個性があることにも驚きました。

まず、人の食べ物をとって食べちゃう子もいれば、食べたくなくて泣く子もいれば、黙々と食べる子もいればと、どうしてこんなに違うんだろうと疑問を抱いたのと同時に、生後の親との関わり方、子供のこころの成長など、幼児の心理学にも目覚めたのです。

尾道市医師会のご縁で看護学校の授業や、市民病院でのカウンセリング室の担当など、いろんな仕事が入ってきました。現在、看護学校の講師も15年になります。年齢的なことを考えて、辞めようと思っていたのですが、今年はカリキュラムの大改革の年になってしまいました。

今までは患者さんの心理で医学書院テキストを中心に、急性期、慢性期、終末期医療だったり、様々な心理学の授業を伝えてきました。

本年度は「患者の心理」と「人間関係論」「コミュニケーションスキル学科」の基礎作りの依頼が医師会から来ていますので、もうひと息頑張ることにしました。今年から２学年３教科を担当することになったのです。

また、（株）セプルミエールという法人を立ち上げて11年を迎えました。そこではカウンセリング事業を主として、セラピスト育成、カウンセラー育成、トレーナー育成、講演会活動、企業研修、子育てセミナーなどの活動をしております。

― ヒプノセラピーを学ばれたきっかけを教えてください。

私自身が波乱万丈の人生でしたから、幼少期からなんのために生きているのだろうとか、どんな役割があるのだろうとか、生きる価値って何だろうとか、どこから来たのだろうか、とかいった根源的な疑問を持って生きていました。

私の家族は兄弟と両親だけでなく、いとこが一緒に育ったり、おばさんがいたりと複雑な人間関係の中で子供時代を過ごしました。何かあると川辺でハーモニカを吹いたり、山に登って下の様子を客観的に見て感じたり、遠くを見てどんな町があり、どんな未来があるのかなあと、いろいろなことを考えていた不思議ちゃんでした。

育った地域は山奥でもダムや発電所、製炭業の大住宅などがあって、他地域からの転勤の人や海外からのいろんな人が住んでいました。たくさんの人たちとのご縁と、出会いや別れも多かったです。

大きな事故にあい後遺症に苦しみ人生の中で生きていくことが辛くなったときに、出雲大社で修行のご縁をいただき、そこで神様の世界に出会いました。

出雲大社はご縁の神様だと思っていらっしゃる方が多いですが、実は幽世（かくりよ）の世界を司る神様でもあるのです。あの世を守る神様です。そこでの修行の中で、あの世の世界というのを教えていただきました。

亡くなった人たちの魂を供養したり、般若心経をあげ、大海原に依り代（よりしろ）を流すのです。それは魂の浄化向上のためです。表には見えない部分ですから不思議に感じられるかもしれませんね。

本殿で夜中に祝詞をあげる修行をするために、滝で身を清めることや、輪廻転生などたくさんのことを学びました。どう生きていくべきか、生きる姿勢、人に対する真心、自分の心のあり方、人を恨んだり憎んだりしない、しなくて済む生き方です。それが未来世に反映されるのですから心の修行だったと思います。

もっと深いものがあるんじゃないかと思っていたときに、エドガー・ケイシーを翻訳された方から「転生の秘密」の本を２冊頂きました。その本で前世が一致しました。そのころの私は透視能力も身についていて、人を見たら家系から人の生き様や問題点が見えたり、その人の影の部分、背負っている苦しみや悲しみとかが見えてくるようになりました。会話をするとその人の前世も見えましたが、あなたの前世はこうですよと言ったとしても、そこに価値は生まれないと思いました。

それよりも、どうしてこうなったのか、どうして今この人生を歩んでいるのかということの方が価値があって、それがこの世の修行でもあり、自分磨きなのだと思えたのです。その頃、前世療法の教えをされている先生に会いたいと思っていました。

そんな時、奇跡的な出会いがあったのです。

私はNLPのトレーナーでもあり、トレーナーとしてアメリカへ受講生達に同行していたことがありました。

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

その時の NLP 仲間から、村井啓一先生とブライアン・ワイス先生の存在を知ったのです。

村井先生の元で学ばれた方が講座を開催されることを知って、私はすぐに開催地の仙台まで飛んで行きました。

その後、村井先生の教室に通うようになって、こんな出来事があったのです。

オメガのブライアン・ワイス先生のセミナーがあることを聞きました。その時、私はすでにフロリダで行われる NLP のコーチングトレーナーの講座に申し込んだ後でした。

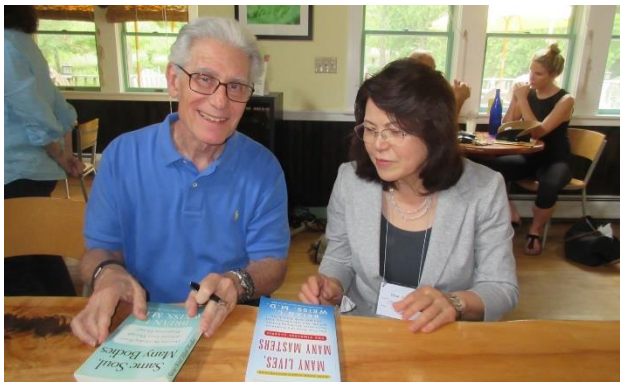
ほぼ同じ日程でしたから行けないと思ったのですが、私の思いは NLP ではなく、今回はブライアン・ワイス先生の学びに行きたいと感じた瞬間でした。

受講費も振り込んだ後でしたが、村井先生の教室から休憩時間に NLP の協会に電話すると、今日までならキャンセル料は発生しないって言われたのでした。更になんと村井先生のところは残り 1 席でした。ブライアン・ワイス先生のオメガは人気で応募者が多くて、そう簡単に入れなかった時代に奇跡的に入れたわけです。

それまでも催眠の学びは NLP を通して 5 人の先生から学んでいましたが、村井先生とブライアン・ワイス先生の催眠は全く違う教えでした。その人を尊重する、その人の意志を大切にする、セラピストの価値観を入れないという姿勢を教わりました。それが一番純粋であり、クライアントさんが求めるところにいち早くたどりつくような気がしました。

それからは無我夢中で村井先生のところで学びました。

初めは前世療法をひたすら実践したものです。結果よりも過程が知りたい気持ちが強く、その過程の中でその人が成長できる可能性がどこにあるのか、どういう人生を歩まれたいのか、クライアントさんの望む意志はどこにあるのか、男性も女性も、自分の過去を知りたい！と思う人が多く休みなくやり続け、たくさん学ぶ機会をいただきました。



オメガにてブライアン・ワイス先生と

村井先生による尾道での前世療法の講義

― 村井先生との初めての出会いで印象に残っていることは何でしょうか？

村井先生とは 2014 年 5 月に岡山で開催された JHA(日本ホリスティックアカデミー)のベーシックコース開催 100 回記念講座を受講したときに初めてお会いしました。

それまで村井先生のホームページを見て、こういう方だろうとイメージしていましたが、実際にお会いしてみると素朴な方でした。「僕は先生なんだよ」という先生ではなく、ありのままで同じ立ち位置で関わってくださる方でした。カウンセラーとしての知識とは全く違う教えであり、目からウロコ状態が続いたのです。

教えは惜しみなく伝えてくださり、「学んだものは人に伝えてこそ新しい知識がまた入ってくる」というのは衝撃的でした。

そこから私も惜しみなく伝えるという考えに変わりました。

― コロナ禍での活動に変化はありましたか？

今はセッションも授業もオンラインが多くなりましたが、コロナ禍になる以前からオンライン授業をしていました。交流分析は、海外とオンラインで講座やカウンセリングなども行っていましたから、コロナ禍になって慌てることはなかったです。

出張がなくなり移動時間も軽減されたので、その時間を利用して以前から書き溜めていた物を本にすることに費やし『ことばの花びらをあなたに － 幸

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

せへの処方箋』が生まれたのです。お陰様で地元の書店・啓文社のベストセラーランキングで７位に入りました。

『ことばの花びらをあなたに － 幸せへの処方箋』

― （株）セプルミエールにはどんな方が多く学びにいらっしゃいますか？

最初は会社員とか、主婦の人とか他県で出会った受講生が多かったのですが、近年は税理士、社会労務士、行政書士、社会福祉士、精神保健福祉士、看護師、ファイナンシャルプランナー、教師など専門職の人がとても多いです。議員さんや看護師長さんなどリーダーも多く、今はリーダー研修も増えました。

コロナ禍で閉鎖的な環境になり、人を理解したい、自分を知りたい、人をどの様に指導したらよいか悩まれている人も多くなったと感じています。

人に関わるときは、自分自身のコミュニケーションを整えてからという思いは強くあります。

自分のコミュニケーションというのは顕在意識と潜在意識のバランスです。リーダーというのは指示命令が多いので、聞いているようで聞いてなかったということもありがちです。個人を知る一つの方法としてパーソナリティ分析があります。それに特化したものを開発していて、そこには無意識も出てきます。優しさは反面、依存という裏の面もあるのです。

リーダーとして偉そうに言っていたけど、僕はこの人に依存していたのかということに気づかれる方や、指示命令ばかりして人の話を聞けていなかったことを発見される方もいて、多くの気づきからご自身が変わられ楽になられる人は多いのです。

議員さんの方で「恥ずかしい話、離婚したい」とある人に話しをしたら、「その前に山田先生のところへ行ったほうが良い」と勧められていらっしゃったことがありました。

催眠療法で時をかけて奥さんとじっくり人格移動で会話しました。すると、僕は妻の話しを全く聞いてなかった、妻を理解してやってなかったと涙されました。

帰宅してから、「僕が悪かった、ごめんね」と、奥さんと向き合い長い時間対話されたそうです。

今は幸せに暮らされています。

教室（左）と野外実習（右）での講義

― インストラクターとして、美妙先生の信念や大切にしてらっしゃることを教えてください。

先ほども話しましたが、「自分とのコミュニケーションを整える」という方法です。

感情のリセットですね。感情にとらわれないということであり、まず自分を整えてクライアントさんに関わるというのが、セラピストとしても大事だと私は思っています。心に余裕のない状態のままや、さっきまで仕事していてその仕事時の感情にとらわれたままクライアントさんに接してしまうのは、申し訳ないと思うのです。

セッションをする前は音楽を聴いたり、祝詞をあげたりをして自分の心を整えてからクライアントさんと関わることを心がけています。

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

また、「セラピストの価値観を入れない」で、クライアントに寄り添うことの大切さは村井先生から学びました。それ以来、セッションがものすごく楽になっています。時をかけながら、クライアントさんの過去世を含めた全人生に寄り添い続けることでしょうか。

クライアントさんの心の中に押さえ込んだ意志を表出させることも心がけています。

セッションは早いと１時間で終わることもありますが、４時間以上になる時もあります。現世から過去世へ、また未来へ行ったり、現在に戻ったり時空を飛び交っていきます。クライアントさんはそうして心の整理や荷下ろしをして、心が軽く成られるのでしょう。

「愛と思いやりと優しさ。地球は学びの学校。」とはブライアン・ワイス先生から学びました。

どんなに困難で危機的状況だと思えたとしても、どのような学びをしなさいと言われているのだろうかと、心をそこに持っていくのです。すると、悲しいとか苦しいとかいう思いよりも、どんな解決法があるのだろうかと考えるようになって、心が未来へ向いて楽になり、解決の糸口も見えてくるものです。

出雲大社にワイス先生ご夫妻をご案内

ー 意志についての美妙先生ご自身の経験をお聞かせください。

実は両親が指示命令型で、親の言う通りの高校を受験したのですが、私の望む学校ではないと心の中で涙を流しながら通学していました。別の高校に行きたかったと思っていたとき、「道」という松下幸之助さんの詩に出会いました。その詩を何度も何度も読んで、自分には自分の道があり、自分の道を歩いていいのだって思ったのです。それは高校１年生のときでした。

親にも学校の先生にも内緒にして一人で手続きをし、希望校にチャレンジしました。

合格して新聞の紙面に名前が載り、親も学校の先生も私の合格を知ったのです。私は自分の意志を出して、こんなに人生が変わるのだということを知りました。自分の意志が叶えられたとき、嬉しくて幸せいっぱいでした。

果てしない未来が開ける気がしたのです。

村井先生との出会いの中で、「アメリカのオメガ・インスティチュートでブライアン・ワイス先生に会いたい」という強い意志が表出した時は迷いがなかったです。

意志の尊重は、悲しかったり苦しかったりした時に自分を抑えてきた時代があったからこそだと思います。

人はいろいろな事情や自分を取り巻く環境で、自分を無理にリセットしたり抑圧したりします。そうであっても本当の自分の気持ち、意志は無きものにはしてほしくないのです。その思いを大切にするということ、それを浮上させることが、未来へ続く道だと思うのです。

私自身そこにたどり着くまでは悲しかったし、親のいうとおりに行動していたときはすごく辛くて、もがいていたと思います。高校時代は、親元を離れて自炊しながら通学していたからこそチャレンジができたのだと思います。

抑圧された環境の中で自分を出せなくて、もがき苦しんでいる子たちは大勢います。

親の指示命令で自分の意思を抑えられた結果、感情障害になってしまった事例もありました。

人生の中で本当にどうしたらいいかわからないこともあるけれど、それは一つの成長のきっかけだと

ワイス先生ご夫妻と美妙先生

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

思うのです。人が成長するために与えられた課題だと思います。それを乗り越えたら、またステップアップした未来が待っているはずなのです。

関わった皆さんが一瞬でも輝けることが出来て、幸せになってほしいと思っています。

【こころに残る事例１ － 命とのお別れ】

このクライアントさんとは命の最後まで関わりました。来られたときは 45 歳で末期癌と話されていました。知人の紹介でいらしたのです。

催眠療法については何も知らずに来て下さったので、催眠療法の内容を伝えましたら、全て受けてみたいと言われたのです。「どんなことが知りたいですか？」の問いに「病気のこと」でした。

体細胞療法の旅を始めたのですが、退行するといきなり、子供のころのお父さんに海のそばにある木に吊り下げられた恐怖体験が出てきたのでした。時間をかけてお父さんとのコミュニケーションを完結し、幼少期の心の傷を癒しました。

その後、病の原因を知るためにがんとの対話をしました。すると、彼女はものすごい頑張り屋さんだったのです。学校改革をするために、自分を犠牲にして頑張っていました。

この病が気づかせてくれたことは、人のために生きることも大事だけど、自分の人生を生きることの大切さでした。

既にガンが転移して進行していましたが、心理学を勉強したいと、自動車で１時間半かけて学びにきて下さった時期もありました。様々な角度で自分を知る涙々の日々となり、自分を愛おしく思われる様になられていきました。やがて動けなくなり、オンラインに切り替えセッションをし続けました。

身体の浄化セッション後、「体の中から黒いものが出てきたよ。すごく体が軽くなったよ」と、嬉しそうに電話をくれたときは私も嬉しかったです。彼女とのセッションを何度も繰り返しました。

2020 年 2 月に私はニューヨークの福祉研修から帰って、入院している彼女にアメリカのお土産を持って会いに行きました。彼女は喜んでくれて「今度は私もニューヨークに連れてって」と会話に花が咲きました。お別れのとき「先生、今日私は幸せだったよ」と彼女が言ってくれました。

一生懸命生きている彼女が愛おしくて、彼女を抱きしめ、お互い声を出して泣きました。全身の筋力が失われていることにおどろきと悲しみが込み上げました。

それから５日後に彼女は未来世へ旅立ったのです。

葬儀のとき、彼女はとても爽やかでした。未来世の旅もたくさん歩んでいたこともあって、私は「また会えるね」そんな気持ちでした。「みんな来てくれてありがとう。また会えるのに泣かないで」という彼女の明るい声が聞こえてくるようでした。

命とのお別れのときは、未来世をたくさん語り催眠で歩んでみることを心がけてきました。

夢や希望を持って旅立つことがとても大切であることも、催眠療法から学んだのです。

【こころに残る事例２ － 失語症からストレスヒーリングで元気に】

自宅の火災で全てを失い失語症になった２０代女性が、病院の紹介で両親に抱きかかえられておいでになりました。

声が出ない彼女でしたから、涙が流れている状態が続いていました。絶望の果てにいる感じでした。

両親の話を聞いたところによると、火災は類焼で自分の家が原因ではなかったそうです。余計悲しかったのだと思います。私は大切にしていた外国で購入した私の宝物を彼女にプレゼントしました。

その時の彼女の状態では催眠療法しか考えられなかったのでした。

お母さんと一緒に催眠療法のストレスヒーリングを試みました。今振り返るとお母さんと一緒がよかったのだと思います。1 時間ぐらいかけて、いろいろ統合したストレスヒーリングをしました。すると、こわばっていた顔が優しくなり、帰られる頃には一人で歩けるようにまでなりました。

その後はことばが少しずつ出るようになり、ひと月の間にストレスヒーリングを 3 回受けられて日常生活が出来るほどに回復されたのでした。今でも、元気に仕事をされている様子を毎年の手紙に書いて下さっています。

なによりも彼女の回復に驚かれたのは、病院の先生をはじめとしたスタッフの皆さまでした。

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

【こころの残る事例３ － 退行催眠・命の誕生】

命の誕生です。

四国の学校でヒプノセラピーを受講された 30 代の女性です。

「私は結婚しているけど、子供を産まない約束を主人としています」と講座中に言われました。

私はこれは何かあると思ったのです。

講座は全 3 回で、最終日にデモセッションを行います。彼女に受けてみる意志があるのか聞いてみると、こころよく承諾してくれたのです。子供を産まない気持ちがどこで芽吹いたのか、退行の旅を始めてみました。すると、なんとお母さんのおなかの中に行き着きました。

お母さんとお父さんが毎日毎日、子供ができたことで喧嘩していたのです。望まない妊娠だったのです。

お腹の中の彼女は、「私は生まれちゃいけないんだ。生まれても幸せになれないんだ」と、悲しかった思いを感じ、そして同じことを繰り返してはいけないと思っていたのです。

それに気づいてからは、誕生してからの幸せな記憶をいっぱい思い出してもらいました。両親との幸せな記憶を思い出して、「私はこんなに愛されて、こんなに幸せだったんだ」と彼女の目から涙が溢れてきました。

お別れの時「先生ありがとうございました。心がものすごく幸せになりました。」と話してくれました。

数日後「主人と話しまして、恵まれるものなら子供を持とうという話になりました」と彼女から連絡がきました。そして、その半年後には妊娠の連絡が来ました。赤ちゃんの誕生の日には「かけがいのない命をいただいて本当に先生に感謝いたします」と写メールも届きました。毎年子供さんの成長とともに年賀状が届きます。

お母さんのおなかの中に戻れるのは催眠療法しかありません。時空を飛び交い、自由にどこへでも行けるというのは催眠療法の素晴らしさなのです。意識を変えることも早い。それは催眠療法のなせるスキルです。

― 活動を始めてから 36 年目を迎えられたということですが、これだけ長い年月にわたって活動を継続してこられたその秘訣とこれからの未来への展望をお聞かせください。

長年活動してこられたのは皆さんに支えられたおかげです。

（株）セプルミエールを立ち上げてからは、１年の計画をたてコンスタントに講座を開催していました。

学校も医師会も講演の仕事もそうですし、セミナー、企業研修、カウンセリングから広がり、皆さんの紹介からお仕事をいただいています。受講生さんやセッションを受けられた方々から多くの紹介をいただき助けられています。

ラジオの FM 放送でも、レギュラー番組が 3 年になりますが、コマーシャルを流してくださったり、FM の局長さん、スタッフの方々から応援をいただいたり、催眠の理解を深めてくださったり、あちこちで宣伝していただいています。

感謝しかないのです。ヒプノセラピーの認知度が広がることはとても嬉しいです。FM 放送でヒプノセラピー事例を朗読する予定が組まれているそうです。

尾道医師会の学校で教えるときも、催眠を知ってほしいという気持ちから最後の授業でヒプノ体験をプレゼントしています。

前世療法や退行療法や、未来世療法などの希望を聞いて１クラス 50 名ぐらいいますが、グループ誘導しています。

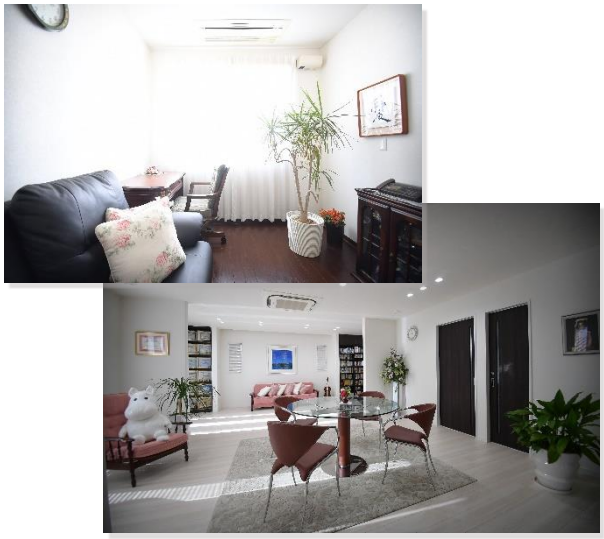
体験された生徒の皆さんは毎回とても感動してくれています。

そして私の人生の集大成として、「こころと身体と暮らしのサポートセンター」というセンター建設を今年着工します。これは、福祉活動とこころ豊かに人生の終着点へ向かう総合センターなのですが、長年の目標であり、私の夢でした。ここで今までどおり講座と催眠療法も実施していく予定です。

（株）セプルミエールで成長して来た皆さんは、税理士、社会労務士、行政書士、社会福祉士、精神保健福祉士、看護師、ファイナンシャルプランナー、教師、公認心理師、企業リーダー、ヒプノセラピスト、TA トレーナー、NLP トレーナー、整体師と頼も

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

【インストラクターインタビュー】



しい方々がいらっしゃいますので、皆さんと力を合わせ、医師会や地域社会と繋がりながら社会福祉活動に力を注ぐ活動を付加していきます。

おかげさまで、地元の方が社会のためになるならと言って土地を提供してくださいました。深く感謝しています。

この 36 年間、たくさんの子供達や人々と関わり、幸せになる為のサポートをしてきました。その中で、幸せとは思えない時代を乗り越えて、立派に成長して結婚している子供たちも大勢います。

私が住んでいる高須町は、尾道で２番目に人口が多い地域です。そこに気がねなく相談にいける場所がないのです。音楽があったり、癒しがあったり、語らいがあったり、食あり、学びあり、といった総合センターとして、ひとりぼっちにならないための居場所作りでもあります。

今、コロナ禍で孤独になっている人たちがすごく増えています。程よく落ち着ける小ホールと大ホールを作り体操や映画や歌やリハビリダンスなどが楽しめる場所にして、地元の人たちに憩いのひとときを過ごしていただけるようにしたいと思っています。

センター設立のもう一つの理由に、（株）セプルミエールで学んで成長してくれた大勢の人たちが活躍できる場を提供したいという思いがあります。私は老いて今の世を去る時が来ますが、若い人たちの活躍の場を造っておきたいと思いました。

皆さんが繋がって何かを目指す。それが未来を生み出すと思うのです。社会の発展となって地域にも貢献でき、個々の自己実現へと繋がると思うととても嬉しいです。

― ヒプノセラピーを学びはじめた方や、ヒプノセラピストを目指す JBCH 会員の皆さんへのメッセージをお願いします。

修行中の私が伝えられる立場ではないのですが、私の経験から言いますと、その人の全人生に寄り添うという意味ではいろいろな角度からそのひとを理解するため、ヒプノセラピーの勉強だけではなく様々な知識を統合して人々に寄り添っていくこと、どんな時も謙虚でいることでしょうか。

そして、ヒプノセラピーにしかできないことがあります。クライアントさんの魂や影に光を当てて、輝かせてあげることが出来たら幸せです。潜在意識の世界を慈しみ、時空を自由に飛び交い、前世やおなかの中から未来まで飛んで行き、亡くなった人にも会えるのはヒプノセラピーの素晴らしさです。

若くして私の主人は病で未来世へ旅立ちました。私が絶望の中にいた時に、また会える、魂がいつもそばに生きている、と感じられたのはヒプノセラピーを体験し学んだからなのです。

ヒプノセラピーをクライアントさんと共に体験するたびに感動しています。

ブライアン・ワイス先生、村井先生でしか学べない知識とスキルがあることも誇りです。

これからも学びを深めながら JBCH 会員の一人として、日本臨床ヒプノセラピスト協会の発展を願いつつ活動を続けて参ります。

― 美妙先生、学ぶところの多い数々のお話をありがとうございました！

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

ヒプノセラピー困ったときの相談室

この相談室では、新米ヒプノセラピストのひーちゃんが日々クライアントさんに向き合い、催眠療法を行っていく中で遭遇する様々な問題や困りごとに対して、先輩ヒプノセラピストの編集委員Ａが懇切丁寧にお答えしていきます。
（編集担当：辻口真紀）

【困ったその１】
「サロンの近くで工事が始まった！
騒音でクライアントさんが催眠に入れなかったらどうしよう！」

ひーちゃん：
セッションの日にサロンへ来たら、近隣で始まった工事の音が室内にまで響いています。セッションに影響がないか不安です。どうしたらよいでしょう。

先輩Ａ：
セッションを行う場合は、できるだけ静かな環境が良いですね。しかし、近くで道路工事が始まったり、緊急車両のサイレンが鳴り響いたりと予期せぬ音に見舞われることもあります。

セッション日時が決まっ後に工事の日程が分かった場合は、工事担当者にセッションの時間帯だけ音を抑えてもらうように事前に交渉してみましょう。それが難しい場合はクライアントさんに丁寧に説明をして日程の変更をお願いするのがよいかもしれません。

それでも、工事が急にはじまってしまう場合もありますし、選挙カーなどの街宣車からのスピーカー音や、そこまでの騒音でなくても近隣の生活音だったり、車のクラクションだったりと、クライアントさんにはいろいろな音が耳に入ります。
そんな時は、催眠誘導の途中で前提を利用した暗示を用いることも有効です。例えば、

「（数の逆唱など深化法）３・・２・・１。深い催眠へ入りました。深い催眠へ入ると、いろんな音が聞こえてきます。時計の音・・エアコンの音・・窓の外からは電車の音や・・時には緊急車両のサイレンや、工事の作業の音が聞こえてくるかもしれません。そういった音が聞こえるたびに、さらに心地よく催眠は深まっていきます。」

この暗示を用いることで、クライアントさんは周りの音がたいして気にならなくなります。ご自身のイメージの中へとどんどん没入され、深い催眠へと入っていきます。

また、セラピストの不安はクライアントさんにも影響を与えますので、自信を持って誘導することも大切です。モニターさんに向き合う場合でも、「私は最高のセラピスト」と自分に暗示かけて臨みましょう。

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

【相談室】

【困ったその2】
「前世療法で誘導して前世に降り立ったら・・・、 全然見えません！の繰り返し。どうしよう！」

ひーちゃん：
前世療法で誘導して前世の時代へ降り立った時、「何も見えません」を繰り返えされるクライアントさん。そこから先に進みません。どうしたらよいでしょう。

先輩A：
クライアントさんによっては前世療法について、知人から話を聞いたり、ネットや漫画・本などの情報から「前世はこういう風に見えるもの」と思い込んで来られる方もいらっしゃいます。
すると、自分で思っていたように前世が見えないと「見えない・・・見えない・・・全然見えません！」ということが起こり得ます。

前世療法での前世の見え方、感じ方は人それぞれ違います。視覚、聴覚、体感覚と得意な認知機能は人によって違いますし、前世と今世で得意な認知機能が異なる方もいます。事前面談で見え方や感じ方の違いをきちんと説明しておくと、クライアントさんも安心して前世を体験することができます。

例えば、「前世が見えるという方もいますが、見え方、感じ方はそれぞれなんです。映像としてフルカラーのハイビジョンで見る人もいれば、冷たい雨が頬をつたうのを感じたり、転んだら痛いとか、草花の香りを感じたり、五感で感じる方もいます。
静止画像が紙芝居がめくれるようにして前世を感じる方や、画像としては見えないけど、お母さんがそばにいると感じて、お母さんの顔もハッキリと見えないけど美人で微笑んでいると感じる体感覚派の方も多いです。中には、音だけ聞こえるという方もいますから、ご自身の潜在意識がどんな風に前世を感じさせてくれるか、楽しみながらやっていきましょう。

そして、特に前世に降り立った直後の場面では、あまり考え込まずにパッと浮かんだものや感じたことを口にして教えてくださいね。その場面が真っ暗でも、真っ白でも大丈夫ですよ。」と、なんでもオッケー、なんでも大丈夫です、と伝えてあげると安心されるでしょう。
初めて前世療法を受けるクライアントさんは、言わなかったとしても「私でも前世が見れるのかしら？」と不安に思っているのです。

事前面談で安心感と期待感を持たせてあげましょう。
それでも「見えません！」と言われた場合は、「見えなくても大丈夫ですよ。」「見よう見ようとしなくても大丈夫です」「感じていきましょう」など、セラピストが安心感を持って受けていきましょう。

見えないことでクライアントさんは焦りを感じているかもしれません。セラピストの優しく落ち着いた声に、クライアントさんは安心して前世の世界を感じることができます。クライアントさんの潜在意識を信頼してナビゲートしましょう。

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

オススメ書籍・メディア

こちらのページでは、ヒプノセラピー各講座の学びとあわせてお勧めしたい書籍等についてご紹介しています。お勧めの作品は多数ありますが、その中から、ヒプノセラピーの活動に役立つ内容のものを取りあげました。ネタバレにはなりますが、さまざまな書籍にご興味を持っていただき、学びを深めるきっかけにしていただければ嬉しいです。
（編集担当：綿引千恵）

『笑いと治癒力』

（ノーマン・カズンズ著／松田銑訳）

「笑いで病気が治る」と聞いて、人はどう感じるでしょうか。「そんな原始的な方法でできるはずがない」と最初から否定する人が多いかもしれませんが、ストレス社会かつ長引くコロナ禍の現在、その可能性に期待する人も少なくないかもしれません。著者のノーマン・カズンズは、難病と分類される重症の膠原病を、笑いとビタミン C による独創的な治療で克服しました。その体験が本書で綴られています。

JBCH 認定ヒプノセラピーベーシックコースのテキストの冒頭でそうです。興味深いのは、患者がプラシーボだと知ったら、プラシーボの生理的な効果は生じないということです。だからこそ、「治ると期待をもたせること、信じさせることこそが大切だ」という考えが紹介されています。

カズンズは、「楽しい心は医師と同じ働きをする」という聖書の一文も紹介していますが、これには古代の叡智が感じられます。カズンズは自身の病気と向き合う過程において、一貫して、心身により快適なことを追求した結果、効果が現れたようでした。また、カズンズはある病気を抱えた若い女性にアドバイスをしました。それは、自然にその女性や家族が笑うことにつながるもので、実際に彼らは次第に明るさを取り戻していったのでした。

本書は、西洋医療を否定しているものではありませんが、代替医療や、どんな人でも自分自身が持っている可能性について大いに学べる内容となっています。原書で発表されたのは 1979 年とやや時間が経っている作品ではありますが、ヒプノセラピーにおける大切なエッセンスについて、また、人間の持つ可能性について学べるという点では、2022 年現在でも色褪せない内容と言えます。これからも、ベーシックコースのテキスト同様に、ヒプノセラピストとしての原点を思い出すことを助けてくれそうな一冊、ということでお勧めしたいと思います。

紹介される一冊である本書では、「患者は心の中に自分の医師（内なる医師・インナードクター）を囲っている」という重要な言葉が紹介されています。これは、アフリカのとある地域（現ガボン共和国）で医療活動を行っていた旧ドイツ出身の医師アルベルト・シュバイツァー博士の言葉です。「人間が本来持っている自己治癒能力を最大限引き出すのを手伝うのが医者やセラピストであり、治すのは患者（クライアント）自身である」というものです。

それは、私たちの知る西洋医学的な「現代の一般的な常識」とは言えないものの、昨今のコロナ禍や世界情勢というストレスの中で、自己治癒能力やプラシーボ効果についての関心はますます高まっているのではないでしょうか。カズンズは、「プラシーボは、その各人の中に住んでいる医者」と表現していますが、内なる医師に限らず、代薬、イメージ、音楽、ユーモアなども挙げています。

プラシーボの言葉の起源は、ラテン語の「わたしは喜ぶだろう」という動詞だ

＜編集担当より本書を読んでの感想＞

私は、2020 年秋にベーシックコースを学んですぐに本書を読んだため、ヒプノセラピーへの理解がより深まったことをよく覚えています。その効果として、あくまでも私の個人的な経験ではありますが、長年苦しんでいた花粉症がほとんどなくなり、昨年（2021 年）はじめから一度も医者にかかっていません。意識の向け方が変わったからでしょう。「病は気から」という表現にも納得する思いでした。こうした劇的な変化に、プラシーボの素晴らしさを改めて実感しました。「わたしは喜ぶだろう」というラテン語も素敵ですよね。ヒプノセラピーをもっと学び、広めていきたいという気持ちになりました。

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

【オススメ書籍・メディア】

『アウト・オン・ア・リム ― 愛さえも越えて』

（シャーリー・マクレーン著／山川紘矢・山川亜紀子訳）

タイトルの『アウト・オン・ア・リム』とは「枝先の果実をとるために身を乗り出すことから《危うい状況に》、《非難を受けやすい》という意味」だとあります。本書は、著者が精神世界に目覚めていく体験を綴った、自伝的な内容となっています。名声ある女優として活躍していた彼女が本書を公表することは、まさしく「アウト・オン・ア・リム」だったということでしょう。

本の内容を紹介する前に、著者のシャーリー・マクレーンを取り巻く宗教観について触れておきます。
シャーリー・マクレーンは、1950 年代から活躍した米国出身の女優です。本書が発売されたのは 1986 年です。アメリカはキリスト教徒の多い国ですが、現在キリスト教では、「生まれ変わりはない」とされています。

JBCH の講座を受講されたみなさんならご存知でしょう。元々キリスト教に生まれ変わりの思想はあったのですが、325 年のニケア公会議で生まれ変わりの記述が聖書から削除され、後に生まれ変わりの思想は異端とされました。キリスト教で国を治めていくために、「生まれ変わりの思想は都合が悪い」ということで「人は死んだら終わり」とされたのでした。

時を経て、アメリカで広く信仰されるようになったキリスト教もその影響を受けており、彼女の生きた時代でもなお、「《生まれ変わり》や《スピリチュアルな世界》はあり得ない」、という考えが一般的でした。

また、彼女は、パートナーとの関係にもどかしさを感じていました。自身は離婚してシングルだったのですが、相手は既婚者で、次期英国首相になるだろうとも言われる政界の時の人。彼が離婚することはないだろうし、シャーリーとの関係がバレたら政治生命を失ってしまう！という状況でも、2 人は惹かれ合い、世界中で逢瀬を繰り返していたのでした。

そんなあるとき、彼女は周りの友人たちとの交流を通じて、精神世界への扉を開いていきます。精霊とチャネリングするという霊媒を紹介され、その精霊たちから、パートナーの彼との前世での関係を聞かされたり、友人から精神世界を理解するための手助けをされたりしました。

スピリチュアルに理解のある人との語らいに安らぎを感じることもあれば、「前世」の話題をするとパートナーの彼や友人から変人扱いをされて悲しくなることも。戸惑いながらも、自らの感じるままに精神世界を理解し、彼女が自己探求を深めていく、という話になっています。

発売されると同時に世界的なベストセラーになった作品なので、この本をすでに読まれた方は多いのではないでしょうか。
精神世界を理解するプロセスや宗教観は人それぞれですが、著者は自身の体験を通してその一例を紹介してくれています。また、どのように生きていくかという価値観も人それぞれです。本書に出てくる婚外恋愛のような、世間一般には認められない関係で悩む人もいるかもしれません。

彼女はツインソウルに何度も「何事にも二面性がある」と教えられたと言及しています。良い面と悪い面の融合、東洋と西洋の相互理解…こうしたことは、ヒプノセラピストとしてバランスを保つことを教えてくれているような気がします。ヒプノセラピストとして、個々のスピリチュアリティーを尊重する、多様な考えに触れるという意味でも勉強になるので、本書を読んでみることをお勧めしたいと思います。

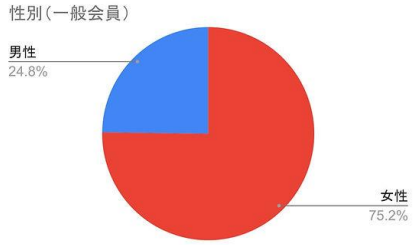
＜編集担当より本書を読んでの感想＞
シャーリー・マクレーンが自己探求を深めていく姿は、ヒプノセラピーを学び進めていく私自身に重なるように思えました。JBCH で勉強することで、様々な考えを知ることはもちろん、自分の過去を振り返ることができたからです。本書を読んで、自分や自分が経験してきたことをより認められるようになった気がします。
また、彼女の家族や恋人が自己探求のきっかけを作ってくれたように、彼女のツインソウルが精神世界への理解を手助けしてくれたように、私にもたくさんの出会いがあったことに気づかされました。たくさんの学びを通じて、人は、私は、生きていくのだということを実感し、読み終わったあとは、この人生で出会うすべての存在に感謝したいと、なんとも壮大な気持ちが湧きあがりました。

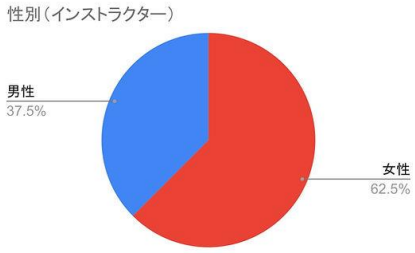
アンケート結果発表

2022 年 2 月にお送りしたアンケートへ、たくさんの方にご協力いただき、誠にありがとうございました。JBCH のサービスをより一層良くしていくためにも、現在の会員の皆さまのお声を参考にさせていただきたいと思います。つきましては、アンケート結果を皆さまへも共有させていただきます。
※今回の結果は、アンケートにご参加いただいた方の統計であり、JBCH 会員全員の回答結果ではないことをご理解・ご了承ください。

1. 性別

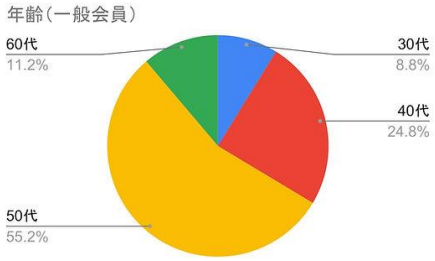
一般会員全体では女性の割合が多いのですが、インストラクターを見ると、男性も 4 割近くいらっしゃいます。

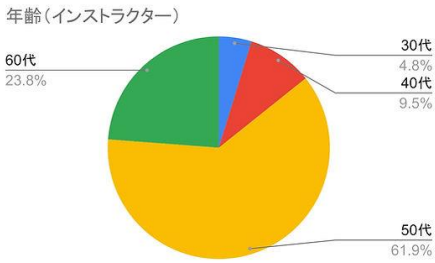




2. 年齢

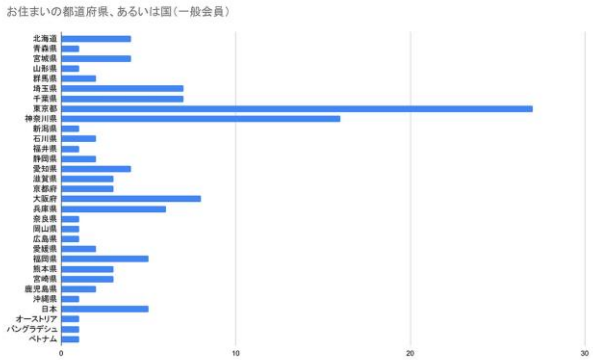
全体的に 50 代が多いことが特徴的です。
30～40 代や 20 代への裾野を広げていくことが今後は必要でしょう。

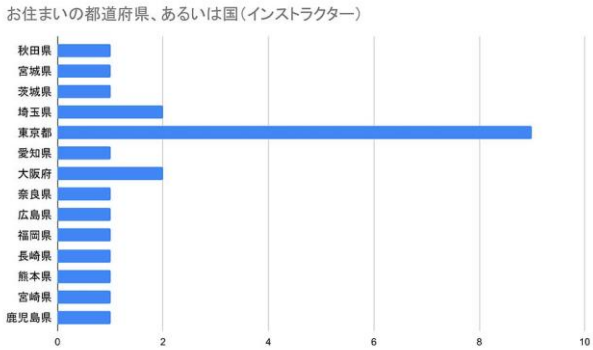




3. お住まいの都道府県、国

一般会員の方もインストラクターの方も、日本各地に在籍されています。
中でも東京都にお住まいの方が圧倒的に多く、裏を返せば、競合が多いということでもありますね…！
インストラクターの方は主に日本で教えていらっしゃる方が多いためか、海外にお住まいの方はいらっしゃいません。現在は Zoom を使用すれば、場所を問わず受講できるということがメリットです。





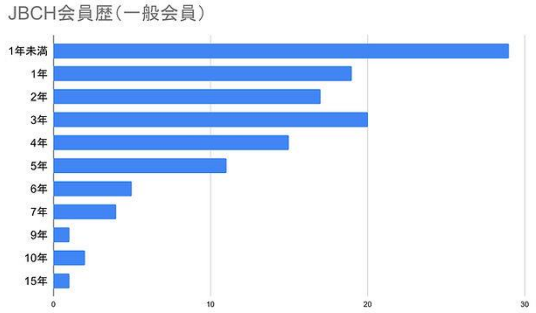
4. 会員歴

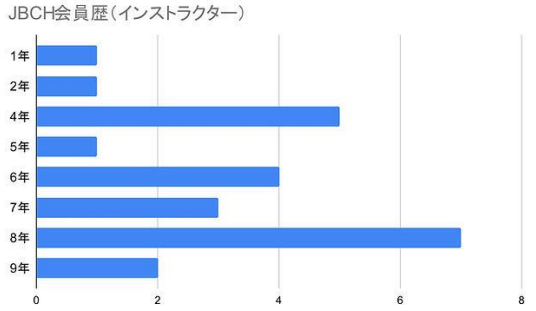
5 年目を一つの基準として考えると、一般会員の方は、会員歴 5 年目までの方が多く、インストラクターの方は会員歴 5 年以上のベテランの方が多いようです。
ヒプノセラピーに興味を持ってくださっている方が今後も増えてくださるといいですね！

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

【アンケート結果】

なお、JBCH 設立は 2013 年ですが、9 年以上の会員歴と回答いただいた方は、村井先生のもとでヒプノセラピーを勉強された年月とみなしています。

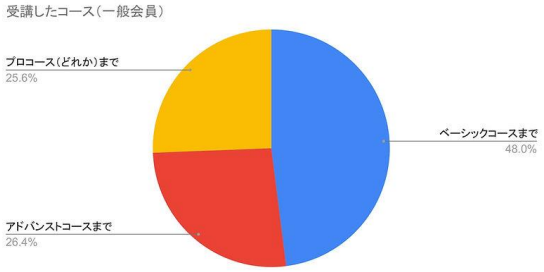


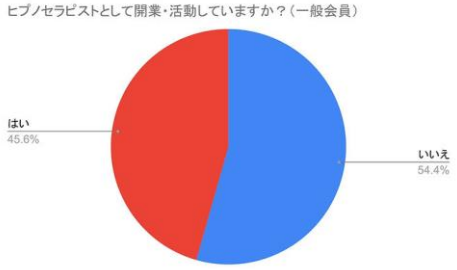


5. 受講コース／開業・活動について

※こちらの質問は一般会員へのみ行いました。

一般会員の中で、ベーシックコースまで受講された方が約半数(48%)、アドバンストコースとプロコースまで受講された方は約 25%ずつという割合です。すでに開業・活動されている方も半数近くいらっしゃることは嬉しいですね。



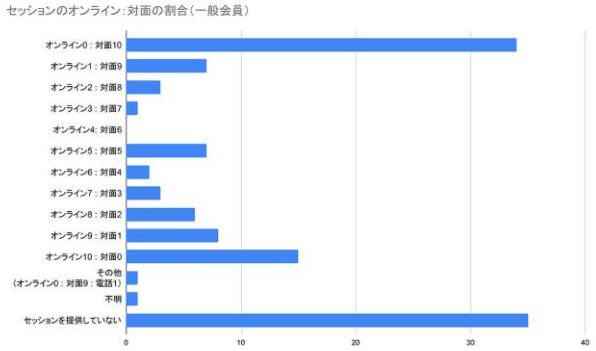


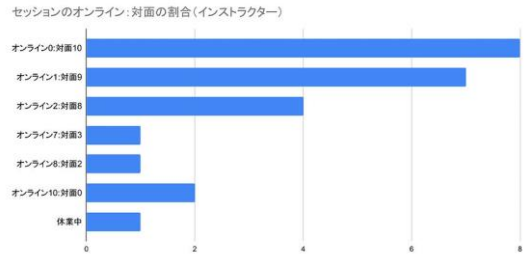
6. オンラインと対面の割合：セッション

コロナ禍のセッション事情を把握するために質問いたしました。

インストラクター・一般会員ともに、対面セッションの比重が高い方が、一番多いのが特徴的です。

一方で、一般会員の中にはオンラインの比重が高く活動されている方もおり、30～40 代のデジタルに親しみのある層が多いことが理由と考えられます。

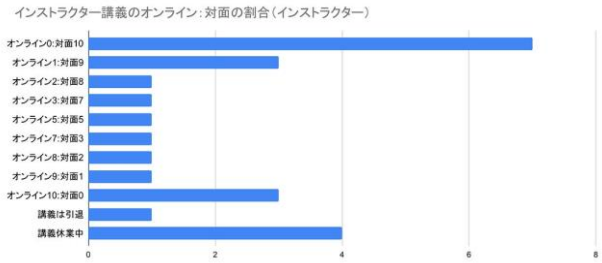




7. オンラインと対面の割合：講義

※こちらの質問はインストラクターへのみ行いました。

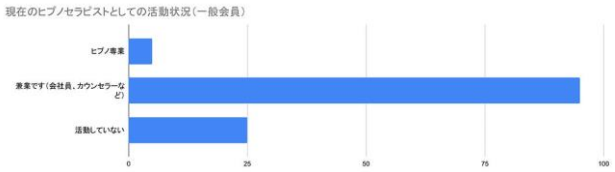
対面を中心に教えていらっしゃる方が多いですが、セッションの結果と比べると、オンラインを活用されている方が多いということがわかります。

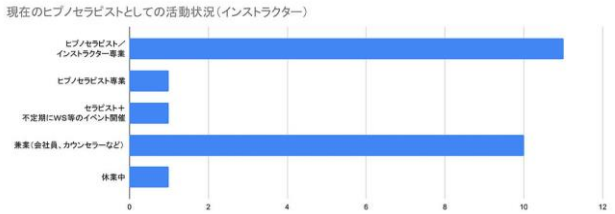


8. ヒプノセラピストとしての活動状況

一般会員の大多数の方は兼業が多いことに対し、インストラクターの方はヒプノセラピー専業の割合が

最も多く、兼業の方も半分ぐらいいることが特徴です。





9. ヒプノセラピーを学んだきっかけ

※こちらの質問はインストラクターへのみ行いました。

「実際に前世療法を受けてみてよかったから。母が亡くなった後、ワイス先生のワークショップに参加、実習の時間に受けました。」

「中学生の頃にあがり症で悩み、催眠であがり症を治せるということに興味を持ったから。」

「村井先生をテレビ番組で見て。」

「私自身が人生に迷い、ヒプノセラピーを受けた。その時に、「いろんな人を癒やしなさい」とガイドから言われた。半信半疑で、ベーシックセミナーを受け、その時にやってみようと決めた。」

「以前より心理カウンセリングの業務は行なっていたが、クライアントを通して潜在意識に直接アプローチする必要性を感じることが多々あり、ヒプノセラピーに興味を持った。」

「カウンセラーとして「傾聴」のみを学んでいたが、重要であるもののあくまで導入部分。その続きとなる技法の習得も必要だなと感じて。」

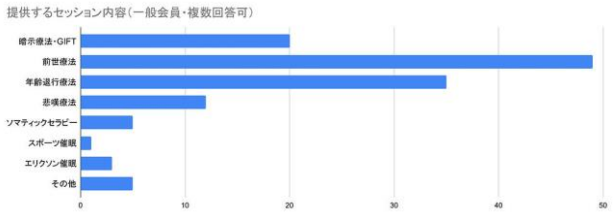
「何か少しでも自分の生きる意味を見出したかったことから、子供の頃から興味のあった魂とは何？と魂の存在に触れてみたかったのがきっかけです。」

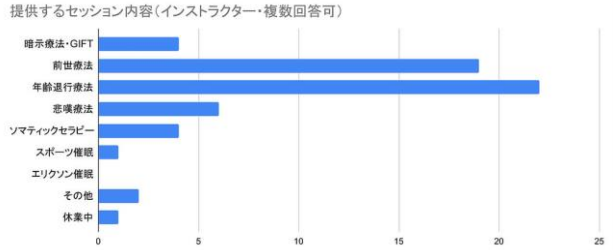
「人間の 1 番奥にある何かを引き出し、根本からの癒しに繋がるのではないかと思いました。」

10. 提供するセッション内容

一般会員の方はベーシック受講までの方が約半数だったので、暗示療法・GIFT も多いですが、全体的にクライアントからの要望が多いのは「前世療法」と「年齢退行療法」のようです。

インストラクターと一般会員で 2 つの数字が逆転しているのは、年齢退行療法でのトラウマ解消などは、やはりインストラクターにまでなられたベテランの方にお任せしたいというクライアントさんの心理でしょうか。

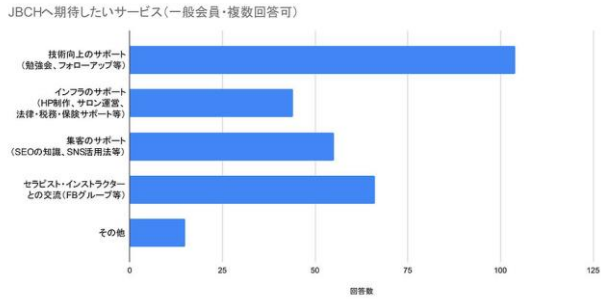




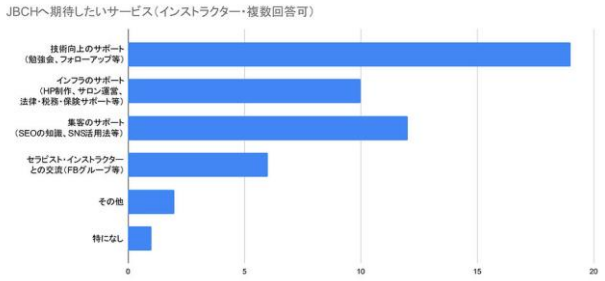
11. JBCH へ期待したいこと

一般会員・インストラクターともに、技術向上のサポートが多いですが、インストラクターの方からはご自身の技術というよりも「JBCH で、全体的に技術を磨く必要がある」というお声もいただきました。

次いで、一般会員はセラピスト同士の交流、インストラクターは集客のサポートへの要望が多いです。



【アンケート結果】



＜一般会員要望・意見例＞

「既に開業されている方々が、どうやって開業の用意をしたとか、何が必要だと思いました。開業に至るまでの体験などが聞けたらいいな、と思います。」

「SNS、ブログ等の作り方が分からない為プロに頼むと高額となる為、最低限の作り方、活用方があれば、ありがたいです」

「SEO・SNS　に迷走が続いています。成功している方がどのように集客をしているのか、お話を伺いたいです。」

「開業しているセラピストの体験や、同じ立場にある人、数年前のヒプノセラピーの違いや関わる人達の現状を知りたい。」

「コロナ禍であるし、なかなか交流の機会がないので沢山の情報がほしい。」

「有効かつ安全な心理療法として、世間での認識がより高まるような取り組みが必要かなと感じています。」

「地方にて在住、開業にため、直接的なセミナー参加や交流機会があまり持てないことに課題を感じています。」

「まだ開業していませんが、開業するまでにはもっと実力をつけてからでないといけないと感じています。その為の練習パートナーを見つけられるラインググループや掲示板的な物などがあると助かります。」

「様々なインストラクターの勉強会があったら楽しそうと思う。」

「セッションで、時に憑依的なエネルギーの存在が現れ、とっさの判断で昇華できたなどのケースもありました。こうしたセラピスト同士の経験をシェアしていただける場があると嬉しいですし、セラピスト全体の向上に繋がると感じます。」

＜インストラクター要望・意見例＞

「セラピスト・インストラクターとの交流に関して、せっかく多くの会員が在籍していて、様々なバックボーンの会員が集まっているため、情報交換や交流を通して新たな化学反応が生まれると思う。」

「コロナ以降、オンラインセッション・講座が完全に市民権を獲得し、セラピスト業界のテクノロジー苦手意識に危機感を感じている。」

「新しい SNS を使った宣伝の仕組みを知ることが課題です。」

「まったくビジネスの経験がなかったこともありますが、地方で集客するのは大変でした。」

「セラピストを養成する立場になって、今までやって来た自己流では足りないと感じています。沢山の方々のご意見や体験談は潜在的なセラピストさんにとっても有効だと思います。」

「禁忌を考慮した上で効果的なセラピーを日々探究、学び提供したいと思っています。」

「TV のバラエティー番組などで見る催眠術の歪んだ演出や過剰な演出」＝「ヒプノセラピーで可能なこと」と解釈しているクライアントさんも少数ですがいるため、正しい理解とミスマッチをなくすために、ヒプノセラピーの正しい内容（脳科学的な観点や心理療法としての観点）について SNS 等での発信をしていくことが必要かなと感じます。ただ私自身、そこまで手が回っていないので、外部の人の力も借りて、いかにそこを今後行っていくかが最大の課題です。」

会員の皆さま、貴重なご意見をいただき、ありがとうございました！

その他のサポートとあわせて、今後、Facebook グループ等でサービスを提供できるよう、検討してまいりたいと思います。

JBCH 会員特典&サポート

JBCH 会員の皆さまのためにご用意している特典とサポートについてご紹介しています。ご入会時（JBCH ベーシックコース修了時）にお配りしているミニ冊子もあわせてご参照ください。
当協会でヒプノセラピーを学ばれた皆さまが、ヒプノセラピーを施術しやすい環境づくりに貢献することと、セラピー技術の向上に役立つ機会を提供することを主要な活動としています。こうした活動を通して、ヒプノセラピーが社会により活用される環境を実現したいと考えています。

法律サポート会員サービス

一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会と当協会の顧問弁護士事務所である戸舘圭之法律事務所との間で、会員向けの法律支援サービスを実施しています。
法的な問題が発生した場合は JBCH の顧問弁護士にお気軽にご相談ください。
また、会員は個別に戸舘圭之法律事務所との間で極めてお得な「法律顧問契約(ライトプラン)」やお手頃な「協力弁護士契約」を交わすことができます。

JBCH 会員特典 無料サービス
初回法律相談＜30 分＞ 無料
（会員年度1年につき1回利用可。繰越不可）

法律サービスは、こんなあなたへオススメ！
○「クライアントさんと、ちょっとトラブルになっちゃった！相談したいな」
☑ 戸舘圭之法律事務所にご相談いただけます。

○「HP を作ったけれど、これでいいのかな？誰かにチェックしてもらいたいな」
☑ 戸舘圭之法律事務所にリーガルチェック（有料）をお願いできます。

○「怪しい人が来たら怖いなぁ…」
☑ 戸舘圭之法律事務所と顧問契約（有料）もしくは協力弁護士契約（有料）を結ぶことで、あなたの HP に「顧問法律事務所 戸舘圭之法律事務所」または「協力法律事務所 戸舘圭之法律事務所」と記載することが可能です。これによって怪しい人が来るのを防ぐ効果が期待できます。

○「ヒプノとは別で、私生活で法律相談したいことができちゃった」
☑ 戸舘圭之法律事務所にご相談いただけます。

詳細につきましては、協会ホームページをご覧ください。
https://www.jbc-hypno.org/legal-support4.

税務サポート会員サービス

ヒプノセラピストとして開業すると税務の問題に関わらざるを得なくなります。法人もしくは個人事業主として開業すると月々の収支の記録を取って、年に一度確定申告を行って税金（所得税・消費税・住民税・個人事業税）を納めなくてはなりません。
一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会では TRAD 税理士法人の協力を得て、会員が安心して本業に専念できるように以下の税務サポートサービスを提供しています。

JBCH 会員特典 無料サービス
メール、電話等による税務に関する簡易相談 無料（月1～2時間程度）

税務サービスは、こんなあなたへオススメ！
○「売上と経費の処理って、どうやればいいの？！」
☑ TRAD 税理士法人にご相談いただけます。記帳代行サービス（有料）もあります。

○「確定申告、代理でやってもらえないかな…」
☑ TRAD 税理士法人では、確定申告書作成サービス（有料）があります。

詳細につきましては、協会ホームページをご覧ください。
https://www.jbc-hypno.org/legal-support4.

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

【JBCH 会員特典&サポート】

施設賠償責任保険サービス

一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH)は、会員全員を対象に施設賠償責任保険に加入しており、JBCH の会員は新たに料金を支払うことなくこの賠償責任保険が自動付帯されます。

JBCH 会員特典 無料サービス

施設（サロン）に起因する対人・対物事故の補償。（ヒプノセラピー施術行為による事故・訴訟費用は対象外です）
日本国内であれば、施術場所を問いません。自宅サロンやシェアルーム、レンタルスペースも対象となります。

保険サービスは、こんなあなたへオススメ！

○「やばい！クライアントさんのメガネを落として壊しちゃった！」
☑ FP エージェンツ株式会社へご相談いただけます。
○ レンタルしたサロンが汚れちゃった…」
☑ FP エージェンツ株式会社へご相談いただけます。

○「サロンへ自転車で移動中、自転車が歩行者にぶつかって怪我をさせちゃった」
☑ FP エージェンツ株式会社へご相談いただけます。

○「念のために火災保険などをつけたいなぁ」
☑ FP エージェンツ株式会社では、有料のプランもご案内しています。

詳細につきましては、協会ホームページをご覧ください。
https://www.jbc-hypno.org/liability-insurance-service

その他の会員サポート

技術向上サポートサービス

○ 協会認定の講座・講習にご参加いただけます。
○ 協会の主催する勉強会・練習会に参加する事により、ヒプノセラピストとしての学びを深め、実践練習の場を経験していただけます。

サロン運営サポートサービス

○ 当協会認定のヒプノセラピスト／インストラクターであることを証明する認定証を発行します。
○ サロンの運営指導や、運営に有益な情報を必要に応じてご提供します。
○ ホームページ作成のアドバイスや SEO 対策、広報・宣伝活動のアドバイス等、サロン運営に有益な情報の講習会へご参加いただけます。

情報提供サービス

○ 会員向け勉強会やセミナー等で、最新の催眠情報や技術情報などが学べます。
○ セラピスト同士の情報交換ができるオンラインでの交流の場（Facebook グループ）をご提供しています。

※これらに加えて、会員の皆さまに有益なサービス内容を随時更新・提供予定です。楽しみにお待ちください。

入会＆会員資格について

一般社団法人日本臨床に入会するには、以下の方法があります。
1）これからヒプノセラピーを学ばれる方
JBCH 認定スクールで JBCH 認定講座を受講することでメンバーになれます。
2）過去にヒプノセラピーを学ばれた方
JBCH 認定スクールでベーシックコース以上の再受講が必要となります。
3）当協会の活動に賛同いただける方
企業・団体・個人を問わず、賛助会員としてご登録いただけます（詳細はお問合せください）。

会員には、JBCH 認定スクールで受講し認定証を授与された「ヒプノセラピスト会員」と、セラピストの養成やヒプノセラピーの講座を教えることができる「インストラクター会員」があり、会員にはそれぞれ会員カードが発行されます。入会金は5,000円(税別)で、年会費はヒプノセラピスト会員・インストラクター会員ともに8,800円(税込)です。（注：インストラクター会員はヒプノセラピストとして会費を支払えばインストラクターとしての会費は不要です。）

『News Hypno』は一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）が発行する協会会員向けの会報誌です。

一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）

※当誌のすべてのコンテンツの無断転載・無断使用はご遠慮ください。

『News Hypno』創刊号 2022 年 5 月発行

発行者：村井 啓一
編集委員：伊藤 若菜 / 辻口 真紀 / 綿引 千恵
編集顧問：松本 一義
発行所：一般社団法人日本臨床ヒプノセラピスト協会（JBCH）
〒141-0022　東京都品川区東五反田 2-7-14　五反田栗の木ビル 3F
https://www.jbc-hypno.org/